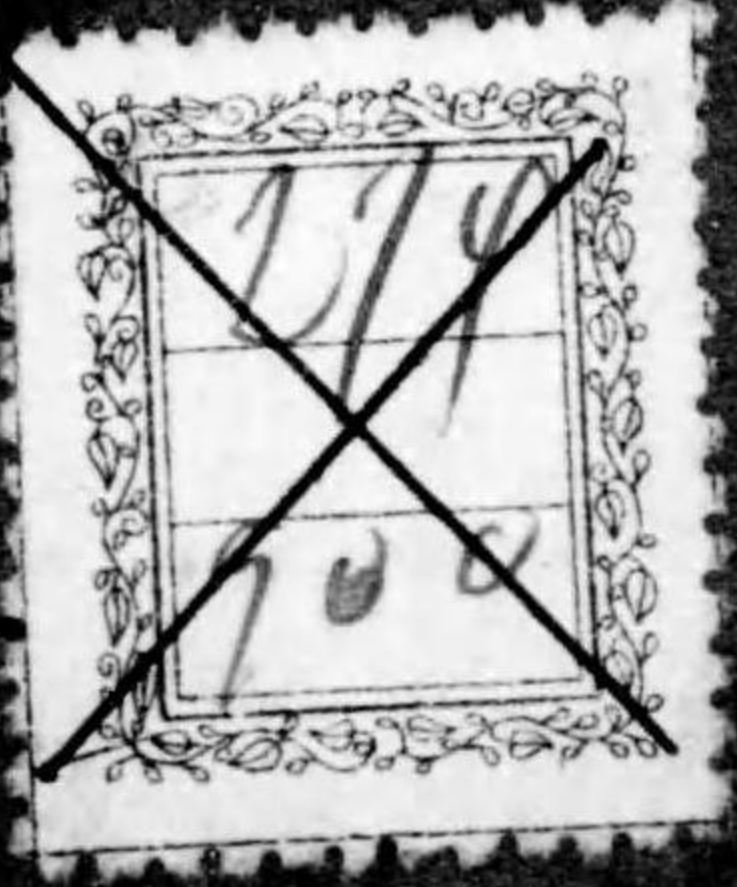


特101
930

書叢ギカ了
メロサ
作ドリイワカオ



始



持101

930

編八第書叢ギカマ



英國文豪オスカア・ウワイルド作

サ

ロ

メ

大正
3. 7. 14
内交

ドルイウウ・アカスオ 著原



(装扮デルガ・リマ) メロサ (装扮ネラフウキ) ナナハヨ

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

(1)

大正三年三月

赤城正藏白

解題

英國の文豪オスカア・ウワイルドは、一千八百五十八年、愛蘭アイランドのダブリンに於て生れた。彼れの母も亦相當の女流作家であつた。この血統を享けた彼れは、若うして既に一異彩を放つてゐた。當初、彼れの生活は極めて贅澤な、そして極めて自由な、情熱の充滿したものであつた。彼れは盛に劇や、小説や、論說に筆を執つた。彼れの前半期は頗る華やかなものであつたが、その終末はまた頗る悲惨なものであつた。一千八百七十六年の希臘伊太利の旅行、一千八百八十二年の米國渡航から掛けて、爾後約十年餘りが彼れの全盛期であつた。千八百九十五年、或る事件の爲に二年間入牢して以來、甚だしい衰頹期に入つて、遂に本國にも居たゝまらぬやうになつて、或は佛國、或は伊太利に遁れ、之れと云ふ創作も爲さず、僅に酒の力を貸りて、甚く零落して餘生いせいのを送つてゐたが、終つひに一千九百年、巴里の小さなホテルの一室に於て、慘憺たる終焉しごひを告げた。

(1)

そして彼れの二十年來の唯一の親友であつた R. Harborough Sherard が、『不幸なる親友オスカア・ウワイルドの歴史』と云ふ美しい一冊を著はして、その靈を慰めた。

本書『サロメ』(Salome)は、一幕物の悲劇で、ウワイルドの作物中、最も問題となつたものである。恰度『ドリアン・グレイの肖像』が彼の小説中の白眉である如く、この『サロメ』は彼れの劇作中の代表作である。詩人は、此劇を一千八百九十一年から、二年の歳月を費して、佛蘭西語を以て書き卸した。當初この劇は、佛蘭西の女優で、世界の女優であるサラ・ベルナルの爲に書き卸したものであると云ふ。無論これには異説もあるが、一般には然ら云はれてゐる。アルノルド著の『近代劇』に依ると、一千八百九十六年、始めて佛蘭西で演ぜられ、その後、一千九百〇一年の三月四日、獨逸ミュンヘンの『アカデミー演劇協會』で演ぜられたとある。又ドクトル・キイフェル譯の『サロメ』の序に依ると、一千九百〇三年二月二十二日、『小劇場』に於て演ぜられたとある。この

時は特別興行で、或る一部の観客を招待して見せたもので、公演としては、一千九百〇三年九月二十九日、同じく柏林の『新劇場』に於て演ぜられた。この時は、例の有名なマックス・ラインハルトが舞臺監督をして、非常な喝采を博したとある。斯くして、この劇は各國語に翻譯され、各國に於て上演されるやうになつた。そして同時に又歌劇としても盛に上演せられた。

さて此劇の骨子は、聖書中にある物語を材題としたのであると云ふことは、謂ふまでもないことであるが、しかし佛蘭西文豪フロオベール作の『ヘロディアス』も亦彼れに感化を與へてゐることは争へない事實である。

今『新約全書』の馬太傳中から、この劇の骨子と成つてゐる處を一二拔萃して見ると、第三章に、

『をの頃、バプテスマのヨハネ來りて、猶太の野に宣傳へて曰ひけるは、天國は近づけり。悔い改めよ。是は主の道を備へ、その路線を直くせよと、野に呼べる人の聲ありと、豫言者イザヤが言ひし人なり。このヨハネは、身に

駱駝の毛衣を着、腰に皮の帯をつかた、蜂と野蜜を食物と
エルサレム及び猶太を擧り、またヨルダンの四方より人々出て、ヨハネに
就き、己が罪を悔いあらはし、ヨルダンにて、彼れよりバプテスマを授けら
れたり。』

また第十一章に、

『さてヨハネ獄にて、キリストの行しし業を聞き、その弟子二人を彼れに遣
はして、曰はせけるは、來るべき者は爾なるか。また我等他に待つべきか。
イエス彼等に答へて曰ひけるは、爾曹が聞くとお見るところの事を、ヨハ
ネに行きて告げよ。瞽者は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者は聞き、
死にたる者は復活され、貧者は福音を聞かせらる。凡そ我が爲に躓かざる
者は福なり。』

また第十四章、

『その頃、分封の君ヘロデイエスの聲名を聞きて、その僕に云ひけるは、是

れはバプテスマのヨハネなり。彼れ死より甦りたり。故に奇異なる能を行ふ
なり。前にヘロデ、その兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に由りて、ヨハネを捕
へ縛りて、獄に入れたり。こはヨハネ、ヘロデに此婦を娶るは宜しからずと
云ひしに因る。彼れヨハネを殺さんと欲へど、民之れを豫言者とするにより、
彼等を懼れたりしが、ヘロデ誕生の日を祝へる時、ヘロデヤの女、その座上
にて舞を爲し、ヘロデを悦ばせければ、如何なる物にても、求めに任せて予
へんと、ヘロデ之れに誓ひたり。女その母の勸めありしに因り、バプテスマ
のヨハネの首を、盆に載せて此に賜れと曰ふ。王憂ひけれども、既に誓ひた
ると、席に列れる者の爲に、予ふることを命じ、即ち人を遣はし、獄に於て
ヨハネの首を斬らせ、その首を盆に載せて女に予へければ、女は之れをその
母に捧げたり。ヨハネの弟子等來りて、屍を取り、これを葬り、往きてイエ
スに告ぐ。イエス之れを聞きて、人を避け、船に乗りて其處を去り、さびし
き處に往き給ひしが、衆人聞きて、歩行にて彼れに従へり。云々。』

とあるのが、夫れである。

終りに、本書は、規定の紙數に餘裕があつたので、特に全譯とした。そして猶處々に説明語を附して置いたから、原文よりは良長文となつた。臺本には、主として前述のレクラム叢書中のドクトル・キイフェル譯の「サロメ」に従つた。

大正三年六月廿七日

淺草の下町にて

編者識

サロメ

オスカア・ウロイルド原作
村上 静人 編

發端

猶太國ゆだこくの四人共治者よにんきやうぢしやの一人たるヘロデス・アンチパス王は、殘忍ざんにんにも自分の兄に當る先王せんわうを斃たふして、自ら代つて王となつた。そして先王の妃きさきであつたヘロデアスを入れて自分の妃とした。

ヘロデス王は、こんな風ふうで頗る原始的げんししてまほんかうの本能の勝つた性質で、何事でも自分が斯うと思つたら、何處どこまでも夫れを押し通おしとほして遣るといふ、極めて暴虐ぼうぎやくな君ではあるが、しかし夫れだけに又、單純たんじゆんな質朴しつぽくな處もある。だから神も信ぜず、

世上の自分に對する風評にも耳をかさず、只自個の本能に従つて、殘虐を事とする所謂暴君といふ程ではなかつた。それ故に、常に先王に對する自分の暴虐の罪を思ふては、時々良心の苛責に悶えることもある。また民衆の自分に對する風評にも心を勞し、自分よりも強者たる羅馬の皇帝に對しても、その思はくを顧慮するなど、何處となく弱者らしい様子も見える。斯うして自分の暗い影を怖れる處を見ると、決して眞の暴君ではないのであつた。

先王の妃で、更に今の王へロデスの妃となつてゐるへロディアスは、極めて冷酷な女性で、殆ど愛情といふものの影は何處にあるかと思ふ位である。さればこそ、八千代までもと契つた先王の仇たる今の王へロデスと棲を重ねて、更に心に疚しいとも思はず、また世人の自分に對する風評にも、恬として耳をかさず、只管己れの虚榮を満たすことにのみ汲々としてゐる婦人であつた。

この妃へロディアスと先王との間に出來た姫君に、サロメと云ふ女性があつた。絶世の美人で、その若々しい美しい妖艷な姿には、見る人毎に胸裡を躍ら

したものである。しかしこの冷酷といふよりも寧ろ殘忍な母へロディアスの血を受けたサロメは、若い燃ゆるが如き情熱の間にも、何處か冷かな處があつて、時に恐ろしい殘忍な影の閃くこともあつた。

處が、へロデス王は、この現在の自分の妃の生んだ娘サロメに戀するに至つた。譬へ眞の自分の子ではないまでも、サロメの母を妃としてゐる今の身にとつては、自分の子も同じである。否サロメの母へロディアスを自分の妃とすると同時に、サロメをも實際に於て姫君として待遇してゐるのである。その娘に戀すると云ふが如きは、道徳心の毛頭もない、本能的原始的な王の性格を最もよく現はしてゐる。しかし前にも云つた通り、へロデス王は決して眞の暴君ではないから、斯様にサロメに戀はしても、直に自分の本能を満足せしめるために、殘虐な手段に訴へるやうなことは爲得なかつた。これが若し眞に原始的本能のみ發達した暴君であつたら、立所に妃を何とかして、暴力を以てもサロメを妃としたであらうが、へロデス王はまだ其處までは達してゐなかつた。唯事

に觸れ、折に付けて、サロメの機嫌を取つて、機會を待つといふに留つた。しかしサロメは之れに對して頗る冷淡なもので、その甘い詞を、殆ど耳にも入れない有様であつた。従つてヘロデス王は徒に胸を燃すに過ぎなかつた。

この王のサロメに對する戀を知つた妃ヘロディアスは、嫉妬の焰を燃して、常に眼を見張つて警戒し、屢々ヘロデス王と爭論ふこともあつた。寧ろ今では王の心がサロメに移ると共に、妃に對する愛情は醒めて來た。これと同時に、妃の王に對する愛情も全く消えて、王と妃との間は、頗る冷かなものであつた。またヘロデス王が、侵略して放逐したある王の子に、ナラボトと云ふ若いシリヤ人があつた。そして此放逐した王の妃はヘロデス王の妃ヘロディアスの奴隸とした。そこで此關係からして、その子のナラボトと云ふ若いシリヤ人もヘロデス王に仕はれて、殆ど今では王ヘロデスから客分扱ひを受けて、王の守衛兵として、大尉にまで昇進してゐる。この若いシリヤ人も亦サロメの美しい姿に思ひを寄せてゐた。けれどサロメは殆ど相手にもならなかつた。そしてヘロ

デス王も、自分の戀してゐるサロメに、この若いシリヤ人が思ひを寄せてゐるといふ事も薄々は知つてゐたが、それが爲にこの男を憎むといふやうな事もなかつた。

處がこの當時、この國にヨハナアンといふ豫言者が現はれた。何時何處から來たのか、彼れの前身は何であるか解らない。世人は種々な風評を立て、賞める者もあれば嘲笑る者もあるが、要するに、一人として之れを知つてゐる者はない。彼れは常に恐ろしい事を豫言して歩く。その中にはヘロデス王や、ヘロディアス妃の残忍暴虐の罪を咒つて、何事か恐ろしい應報の來るべきことを豫言するやうにも聞える。

ヘロデス王は遂にこのヨハナアンを捕へて、先王を十二年間も幽閉して、最後に縊り殺して了つた宮城内の古い空井戸の中へ閉し込めた。けれど、ヨハナアンは依然としてその古井戸の中で、ヘロデス王やヘロディアス妃を咒ふやうな、或は何事か恐ろしい事が起つて來るやうな詞を、大きな聲で叫んだ。之れ

を聞いた妃ヘロディアスは、ヨハナアンを憎むこと甚だしく、常にヘロデス王に向つて、私たちを罵つてゐる彼れを、一時も早く何とかして呉れと勧めた。ヘロデス王も無論これを知らないではなかつた。けれど王は多少この豫言者を恐れてゐた。殊に民衆の思はくを甚く氣にしてゐた王は、迂濶に手を下すやうな事はし得なかつた。従つて王はヨハナアンに對しては、當らず觸らず、成るべく避けてゐるやうな様子であつた。

ある時、羅馬皇帝シイザアの使節がこの猶太國へ來た。ヘロデス王は國交上その使節の爲に、盛大なる饗宴を張つた。丁度その當夜恐ろしい一條の悲劇が演ぜらるゝに至つた。

一

猶太の王ヘロデスが、羅馬皇帝シイザアの使節を厚く優遇して、宮殿内に於て、盛なる饗宴を張つた其當夜で、丁度今宵は月夜である。

その饗宴の間に隣接した宮殿内に巨大な觀臺がある。

その觀臺から上手に當つて、一段高い廣いプラツトホームがあつて、それから二段ばかりの階段を昇ると、穹窿狀の入口で、その奥は宮殿である。そして、その左右には炬火を持つた者が警衛してゐる。この宮殿の前のプラツトホームの奥手には、石造の高い礎臺の上に、青銅で造へられた巨大な獅子の臥てゐる像がある。その上手の奥は城壁で、その上には炬火を盛つた盤があつて、盛に燃えてゐる。

宮殿の正面の突き當りは入口の正門で、その左右は高い城壁で、此處にも火盤の炬火が燃えて、四圍を照してゐる。その傍には炬火を翳して立つてゐる者もある。そしてその入口の左右には、石造の腰掛臺が置かれてある。

觀臺の奥に寄つた中央には、古い井戸があつて、その周圍は暗綠色の青銅の井桁で圍まれてゐる。その奥の中央に少し大きい石造の腰掛があつて、その後方はズツと低い石壁で、正門の高い石壁に連続してゐる。

そして觀臺の奥の低い城壁の上から、その石壁外にある樹木の繁茂つた頂きが見えてゐる。その奥は遠く田舎の景色で、月の光に湖水までも見渡される。

青い夜の空には、星が輝いてゐる。

若いシリア人は、宮殿の入口の處に、情の燃えた様子で立つてゐる。その後方の階段の處には、妃へロディアスの扈從が立つてゐる。

首斬役のナアマンは、古井戸の後方の方に、劍を斜に兩手で把持しながら立つてゐる。

カツパドシア人とヌビア人は、正門の入口の右側に立つてゐる。第一の兵士は古井戸の傍の石臺に腰を掛け、第二の兵士は石臺の上に寝轉んでゐる。これ等のカツパドシア人、ヌビア人等は、何れも羅馬から來た戰士である。

宮殿の入口の處に立つてゐる若いシリア人が、

『姫君サロメ様は、今夜は何といふ美しいのだらう。』といふと、その傍にゐ

るへロディアスの扈從は、

『まあ月を見給へ。こんなに見える事は滅多にないよ。丁度墓の中から出て來た女のやうだ。死んだ女のやうだ。死んだ物を探してゐるやうにも思はれる。』といふ。若いシリア人は、それには答へないで、

『實際こんなに見える事は滅多にない。宛然黄色な覆面紗を被つた、銀の足をした小さいお姫様のやうだ。宛然白い鳩の足をしたお姫様のやうだ。姫君は丁度踊つてゐられるやうにも思はれる。』といふと、扈從は猶月を見ながら、

『宛然死んだ女のやうだ。靜かに除々として回轉してゐる。』といふ。

この時、饗宴の間から、大騒ぎの音が聞えて來た。

井戸の傍の石臺に腰を掛けてゐる第一の兵士は、この騒ぎを聞いて、

『何といふ騒ぎなんだ。野獸でも吠えてゐるのか?』といふと、第二の兵士は、『猶太だよ。あの連中は何日でもあゝなんだ。また宗教の事で喧嘩をしてゐる』

のさ。」と心得顔に説明してやる。

『何故、宗教の事なんかで喧嘩するんだらう。』

『なぜだか知らない。が何時でもあの連中はあんな事を遣るんだ。まあ早い話が、法利賽派の連中が、天使はあるものだといふと、ザッドツエ派の連中は、天使なんかあるものぢやないと主張するんだ。』

『そんな事で喧嘩するなんて、實に馬鹿々々しいことぢやないか。』と嘲笑ふ。

宮殿の入口にをる若いシリア人は、

『姫君サロメ様は、今夜は何といふ美しいのだらう！』といふと、扈從は、

『君は絶えずサロメ様を見てゐる。餘り視過ぎてゐるよ。さう視詰めるものぢやない。何か恐ろしいことが起るかも知れないよ。』けれど若いシリア人は、

『本當に今夜は美しい。』と云つて、眞にサロメの姿に酔つた様子である。

古井戸の傍にゐる第一の兵士は、宮殿の入口の方を見遣りながら、

『王様は大變憂鬱な顔をしてゐらつしやるやうだ。』といふと、第二の兵士は、その傍へ寄つて見遣りながら、

『成程、大層憂鬱な顔をしてゐらつしやる。』

『何か、凝と見詰めてゐらつしやるやうだ。』

『誰れかを見てゐらつしやるやうだ。』

『誰れを見てゐらつしやるのだらう？』

『そんな事は、解らないよ。』と頻りと二人で語り合つてゐると、正門の方からカツパドシア人とヌビア人が此方の方へ遣つて来る。

宮殿の入口の前では、例の若いシリア人がまだ頻りとサロメを氣にして、

『姫君は、非常に蒼い顔をしてゐらつしやるぢやないか？ 私はあるな蒼い顔をしてゐらつしやるのを見た事がない。君には、姫君は銀の鏡に映つた白い

薔薇の花のやうには見えないかね？」と扈從に話し掛けると、扈從は、
『さう、姫君ばかりを見てゐてはいけないよ。君はどうして那樣に見詰めてばかりゐるんだ。』と詰る。

古井戸の處では、第一の兵士が宮殿の方を見遣りながら、

『お妃へロディアス様が、王様の盃へお注ぎになつた。』といふと、正門の方から遣つて來たカツパドシア人が、

『お妃へロディアス様と云ふのは、あの眞珠の裝飾の付いた黒い冠を被つて、頭髮に青い髮粉を振り掛けてゐらつしやる、彼のお方が夫かい？』と聞く。第一の兵士は、

『さうよ。あのお方だ。あれが王様のお妃様だ。』と教へる。第二の兵士は、

『王様は大變お酒がお好きで、三種のお酒を持つておゐでになる。その一つはサモス島から取り寄せたもので、羅馬皇帝の外套のやうに紫色だ。』といふ。

すると、カツパドシア人は、

『私はまだ羅馬皇帝を見たことがない。』と詞を扱む。第二の兵士は夫れに關はず、

『二番目の酒は、チルスの町から來たもので、黄金のやうに黄色い色だ。』といふと、カツパドシア人は又、

『私は黄金が大好きだ。』と槍を入れる。第二の兵士は猶詞を續けて、

『第三の酒は、シシリイから來たもので、血のやうに紅い色をしてゐる。』と説明する。之を聞いてゐたヌビア人は、

『私の國の神様は血が大御好きだ。毎年二度宛、若い男と女を犠牲に供へるけれど——若い男を五十人に、少女を百人宛。——夫れでも猶神様が私等に辛く當られる處を見ると、未だく犠牲が足りさうもないやうだ。』といふ。カツパドシア人は、

『私の國には神様はもう一人も居ない。羅馬人のために皆追ひ拂はれて了つ

たんだ。或る人は、その神様たちは山の中に隠れたんだらうと云ふけれど、しかし私はさうは思はない。と云ふのは、私はその神様を探すために、三晩の間、山の中にゐたけれど、到頭見出す事が出来なかつた。そこで私は終ひには神様の名を呼んで見た。けれど神様は遂に出現れてお出でにならなかつた。神様たちは多分死んだんだらうよ。』といふと、第一の兵士は、

『猶太は誰れにも見えない神様を拜んでゐるのだ。』といふ。カツパドシア人は之れを聞いて、

『夫れはどうも、譯の解らない話だ!』といふと、第一の兵士は、

『實際、奴等は眼に見えないものを信仰してゐるんだ。』といふ。カツパドシア人は、

『そんなものを信ずるなんて、實に馬鹿げた話だ!』と笑つた。

この時、豫言者ヨハナアンの聲で、

『私の後から、私よりも遙かに巨大な者が来るだらう。私はその人の靴の紐さへも解くだけの資格のないものだ。荒れる曠野も、その人の足蹟に觸れると、歡びの聲に満ちるであらう。恰も百合の花の咲き満ちたやうに。——盲目は目の目を見ることが出来、盲たる耳も聞えるやうになるだらう。綠兒も龍の臥床に手を差し入れ、獅子をもその鬣を取つて率て歩くだらう。』と云ふのが聞えた。この聲を聞き付けた第二の兵士は、

『あの男に、靜かにしてゐるやうに言ひ付けるが可いぢやないか。彼奴は何時にも彼様愚にも付かん事を喋舌つてる。』といふと、第一の兵士は之れを打ち消して、

『いや然うでないよ。あの人は聖者だ。また非常に溫和い人だ。私が毎日あの人に食物を持つて行つて與ると、彼の人は何時でも私に禮を云ふよ。』といふと、カツパドシア人は、

『一體、あれは誰れなんだい?』と聞く。第一の兵士は、

『豫言者さ。』と答へる。

『何と云ふ名前なんだ。』

『ヨハナアンといふのだ。』

『何處から来たのだ？』

『沙漠から来たんだ。あの人は其沙漠で、蝗蟲や野生の蜜蜂を食べて生きてゐたと云ふ話だ。身體には駱駝の毛の著物を着て、腰の周圍には、なめし革の帯を締めて、見るから素敵な野蠻な風采をしてゐたんだ。けれど何日もあの人の後には、大勢の人がぞろぞろ付いて歩いてゐた。そればかりでなく、あの人は弟子までも有つてゐたのだ。』

『それで、何日もあの男は何を言つてゐるのだ。』

『それは些とも私等には解らんよ。時々何でも驚愕するやうな事を云つてゐる。けれど、何の事だか些とも解らないのさ。』

『あの男に逢つても可いだらうか？』

『不可ないよ。王様はあの男に逢ふことを禁じられてゐるのだ。』と第一の兵士は、豫言者ヨハナアンに就いて、カツパドシア人に語つて聞かせてゐる。

宮殿の入口の處では、例の若いシリア人が、

『姫君は、扇で顔をお隠しになつた。おの小さいお手が、翼を擴げて飛んで行く鳩のやうに、ひらひらしてゐる。姫君は白い蝶々のやうだ。宛然白い蝶々のやうだ。』といふと、扈從は、

『何故そんな事を氣にしてゐるんだ！ どうして彼のお方ばかり那樣に見てゐるんだ？ さう彼のお方ばかり見ては不可ないよ。——何か恐ろしい事が起つて来るかもしれないから。』と注意してゐる。

此方の古井戸の處では、例のカツパドシア人が、古井戸を指示しながら、
『何て變手古な牢獄だらう！』と云ふと、第二の兵士は、

『古い井戸なんだ。』と説明する。

『古い井戸。——では身體の爲に良くないだらう？』

『いや、然うでないよ！ 例へて見ると、王様の御兄弟だ。私はあの王様の

お兄様、——お妃へロディアス様の最初のお連合の事を思ひ出すが、そのお方

は、あの中に十二年間も幽閉されてをられたが、それでもお死になさらなかった。

そこで到頭終ひには、絞め殺されて畢はれるやうになられたのだ。』

『絞め殺す？ 誰れが那樣ことを爲たのだ？』とカツパドシア人が問ひ返す

と、第二の兵士は、巨大な身體をした黒奴の首斬役を指示しながら、

『彼處にゐるナアマンだ。』と教へる。

『あの男は恐がりは爲なかつたのか？』

『なあに。王様があの男に指輪をお遣りになつたから。』

『どんな指輪なんだ？』

『死の指輪をさ。だから彼の男は恐れなかつたのさ。』

『しかし、王様を絞め殺すなんて、實に恐ろしいことだ。』
『何故恐ろしいのだ？ 王様だつても皆と同じやうに、首は一つしかないのだよ！』

『けれど、私は恐ろしい事だと思ふよ。』とカツパドシア人と第二の兵士とは頻りと話し合つてゐる。

此方の宮殿の入口では、若いシリア人は猶サロメを見詰めて氣にしてゐる。

『姫君はお立ちになつた！ 食卓を離れられた。姫君は倦屈してゐらつしや
るやうに見える。——あッ！ 此方の方へおいでになる!! さうだ。丁度私た

ちの方へ向つておいでになる！ 何といふ蒼いお顔なんだらう！ 私はあんな

お顔を未だ一度も見たことがない。』といふと、ヘロディアスの扈從は、

『あのお方を見ては不可ないよ！ お願ひだから、見ないやうにして呉れ。』
といふ。けれど、若いシリア人はそんな事には頓著もなく、

『姫君は丁度路に迷つた鳩のやうだ。——風に揉まれてる水仙の花のやうだ。——白銀の花のやうだ。』と云ひながら、恍惚として見惚れてゐると、サロメは宮殿から現はれて来た。

二

宮殿から現はれて来たサロメは、獨語のやうに、

『いえ、私はもう此處に居たくないのです。居られないのです。何故王様はあのびくびく震ふ險の下の土龍のやうな眼で、私を見詰めてゐらつしやるのでせう？ お母様のお連合が、あんなに私を見てゐらつしやるのは可笑しい。それは何ういふ譯だか私は知つてゐる。——私は能く知つてゐる。』と眩くと、彼の若いシリア人は、サロメに向つて、

『只今お席をお立ちになつたのでございますか？ 姫君様。』と聞くと、サロメは夫れには答へないで、

『あゝ、此處の空氣は本當に快い氣持だこと。本當に蘇生るやうね。彼處にはエルサレムから来た猶太人が、詰らぬ儀式のことで噛みく争論つてゐるし、野蠻人は矢鱈にお酒ばかり飲み通して、床の上へ溢したりするし、それからスミルナから来た希臘人は眼や頬を彩色つたり、縮らした髪の毛を捲き上げてるし、無口で狡猾い埃及人は、腎石のやうな長い爪をして、褐色の外套を着てゐるし、それから野卑で亂暴な羅馬人は、何時も喋舌りばかりしてゐるんですもの。賤しい癖に、貴族でもあるやうな風をするんですもの！』といふと、若いシリア人は、

『お掛けになりませんか？ 姫君様。』と話し掛ける。扈從は、

『何で君は姫君様にお話し爲掛けるんだ？ 何でそんなに姫君様を見詰めてるんだ？ 何か恐ろしい事が起るかも知れない。』と物思はしい容子のサロメはそれには耳も傾けず、空を眺めて、

『まあ、何といふ佳いお月だらう！ 丁度小さなお貨幣のやうにも見える。

宛然可愛らしい銀の花のやうだ。冷くつて而して汚れない。本當にお月様は純潔なこと。あれこそ純粹の美だ。——本當にお月様は潔白なこと。屹度誰れにも汚されはしなかつたらう。他の女神たちのやうに、男の肌に觸れるやうな事はなさらなかつたらう。』といふと、この時古井戸からヨハナアンが、

『主が來られた！ 人の子が來られた。セントロオス(半身半馬の怪物)は河に隠れ、サイレン(半身半鳥の妖女)は河から逃げ出して、森の中の木の葉の茂みに身を隠した。』といふ聲が聞えた。サロメは之れを聞き付けて、

『あの聲は誰れなの？』と聞く。第二の兵士が、

『あれは豫言者でございます。姫君様。』と答へる。

『あゝ、あの、王様の恐れておみでになる豫言者なの？』

『それは、私共は存じません、姫君様。しかし彼れは豫言者でございます。』といふと、若いシリア人は、

『お肩輿を持つて参りませうか？ 姫君様。今夜はお庭園の景色が、大層美し

らでございますから。』とサロメの御機嫌を伺ふ。けれどサロメはそれには答へず、

『あの男は、私のお母様に就いて恐ろしい事を謂つてるよ。さうぢやないの？』と聞く。第二の兵士は、

『あの男の云ふ事は、私共には些とも解らないのでございます、姫君様。』

『多分、あの男は、お母様に就いて恐ろしい事を謂つてゐるのよ。』といふ時、宮殿から奴隷のマナツセイが遣つて來て、サロメに、

『姫君様、王様には姫君様に、宴會の席へお戻りになりますやうにとの事でございます。』といふと、サロメは、

『私は歸りたくないの。』と無情く云ふ。若いシリア人は、

『憚りながら、姫君様、お席へお戻りになりませんか、宜しくないかと存じます。』と詞を添へる。けれどサロメは耳にも留めず、

『豫言者は、もう老人なの？』と聞く。若いシリア人も、

『姫君様、お戻りになりました方が宜しうございませう。私がお件を致しま

せうか?』といふ。サロメは重ねて、

『豫言者は、もう老人なの?』と聞く。第一の兵士は、

『いえ、姫君様、まだ全く若い男でございます。』と答へると、第二の兵士は、

『それは解るものか。ある人はあの男はエリアスだとも云つてゐる。』といふ。

サロメは、

『エリアスつて、誰れなの?』と問い返す。第二の兵士は、

『エリアスと申しますのは、この國の極く昔の豫言者でございます、姫君様。』と答へる。奴隷はサロメの返事を待ち兼ねて、

『姫君様の御返事を、王様に何と申しあげませうか?』と聞く。この時また井戸からヨハナアンの聲で、

『パレスタインの國よ。お前を打つた筈が折れたとて歡喜ぶな。蛇の卵から龍が生れるだらう。そしてその雛は鳥を嚙下みにするだらう。』と叫ぶのが聞えた。之れを聞いたサロメは、

『何といふ變な聲なんだらう! 私はあるの男と話をしてみたいよ。』といふと、第一の兵士は、

『さう云ふ事は出来ません。姫君様! 王様は、誰れでもあの男と話をすることを免しがございません。高僧様にもあの男と話をすることを禁めになりました。』といふ。サロメは猶、

『けれど、私は話が見たいの。』と繰り返す。若いシリア人は、

『姫君様、どうもお宴席へお戻りになつた方が宜しからうと存じますが!』といふ。しかしサロメは、

『あの豫言者を連れて来ておくれ。』と命じた。今は若いシリア人も止む事を得ずして、それと奴隷に指圖すると、奴隷は空しく宮殿の方へ歸つて行つた。

第一の兵士は、サロメに向つて、

『私どもには、どうも、さう云ふ事は出来兼ねます、姫君様。』といふ。サロメは古井戸の縁に立ち寄つて、下の方を見下しながら、

『この下は、何といふ暗いのだらう！　こんな暗い穴の中にをるなんて、定めし恐ろしい事だらう。宛然墳墓のやうね。』と云つて、再び兵士の方を振り返つて、

『お前には、私の云つた事が解らなかつたの？　あの豫言者を連れて来てお呉れ。私はあの男と話しがしたいのだから。』といふ。第二の兵士は、

『姫君様、この事ばかりは何卒お免しを願ひます！』といふと、サロメは、

『私を焦らさせないやうにしてお呉れ！』と云ふ。第一の兵士は、

『姫君様、私共の命は姫君様の御意の儘でございます。けれど何でも姫君様のおつしやる通りに爲る事は出来ません。どうか此事だけは私共にお云ひ付けなさらぬやうに願ひます。』と歎願する。サロメは若いシリア人を見遣りながら、

『あゝ！』と唯一言歎聲を漏らした。ヘロディアスの扈從は、

『あゝ、どう成るだらう。屹度何か恐ろしい事が起つて来るだらう。』と歎息した。サロメは若いシリア人の傍に寄つて、

『ナラボトや、お前は私の云つた事を爲てお呉れだらうね。えッ、さうぢやないの！　私は何日もお前に優しくしてゐたらう。だからお前は私にこの事を爲てお呉れだらう。唯私はあの男に逢つて見たいの、あの變な豫言者に。世間では随分あの男に就いて種々ことを云つてゐるね。王様も度々あの男の事をお話しになるのを聞いたよ。私は、王様はあの男を恐れてゐらつしやるのだらうと思つてよ。ね、ナラボトや、お前もあの男を恐れてゐるの？』と聞くと、若いシリア人は、

『いゝえ、姫君様、私は誰れも恐れてる者はございません。けれど、王様は誰れでもあの井戸の蓋を上げる事をお禁めになりました。』と答へた。けれどサロメは猶詞を重ねて、

『けれど、お前ばかりは爲てお呉れだらうね、ナラボトや。さうすれば、明日私が偶像賣の門の下を肩輿に乗つて通る時に、私はお前に可愛らしい花を投げてあげるよ。可愛らしい青い花を。』といふと、若いシリア人は、

「姫君様、私には出来ません。私には出来ません！」と否む。サロメは猶微笑を漏らしながら、

「お前爲てお呉れでせう、ナラボトや。お前判つてらう。お前この事を爲てお呉れだらう。さうすれば、明日偶像賣の橋の傍を肩輿に乗つて通る時に、私は綿紗の覆面衣を透して見てあげるよ。私はお前を見てあげるよ、ナラボトや。多分私は笑つて見せてあげるだらうよ。ナラボトや、私を御覽！ お前判つてらう。お前、私のこの頼みを爲てお呉れだらう。お前能く判つておるでだらう。さうぢやないかえ？ 私は能く知つてゐるよ。」とサロメは、この若いシリア人が自分を想つてゐることを知つてゐるので、斯う優しく云つて、自分の頼みを爲せようとした。茲に於てか若いシリア人は、遂に第二の兵士に合圖をして、

「豫言者を連れて来て呉れ。姫君様がお逢ひになりたいと被仰るから。」と命ずると、第二の兵士は心得て、古井戸の中へ下りて行く。間もなく鎖のガラガラ

ラ鳴る音がして、重い金屬製の戸を閉づる響が聞えて来た。之れを聞いたサロメは、思はず、

『あゝ！』といふ聲を漏らした。ヘロディアスの扈從は、空を仰いで、

『おゝ、こんな風に月の見える事は滅多にない。まるで、帷衣を自分で掛けようとしてゐる死人の手のやうだ。』といふと、若いシリア人も、

『實際、こんなに月の見える事は滅多にない。琥珀の眼光をした姫君のやうだ。宛然あの月は、若い姫君のやうに、綿紗の雲を透して、莞爾と微笑つてゐる。』といふ。

この時、豫言者ヨハナアンは、古井戸の中から上つて来た。その後から兵士も附いて来る。サロメは豫言者を見ると、靜かに後退りした。

三

古井戸から出て来た豫言者ヨハナアンは、井戸の縁に立ち留つて、

「嫌悪の盃に満々と酒を注いだ男は何處にゐるか？ 銀の裳裾を曳いて、何日かは大勢の目の前で死ぬべき男は、何處にゐるか？ その男に此處へ来いと云へ。沙漠や宮殿の中で、彼れの叫聲の響くのを聞くために。」といふ。之れを聞いたサロメは、

「あの男は、誰れの事を云つてるの？」と聞くと、若いシリア人は、

「何の事だが解らないのでございます、姫君様。」と答へる。すると、又ヨハ

ナアンは、

「壁の上に描いた男共の像、彩色られたカルデア人の像を見て、彼れの眼の快樂に溺れて、カルデアに使者を立てた女は、何處にゐるか？」と叫んだ。サロメは之れを聞いて、

「あの男は、私のお母様のことを謂つてゐるのよ！」といふと、若いシリア人は、

「決して、さうではございません、姫君様！」といふ。しかしサロメは、

「いゝえ、あの男は私のお母様のことを謂つてゐるのよ！」といふ。又ヨハナアンが、

「腰には裝飾を附け、頭には華美なる冠を付けたアツシリアの隊長に溺れた女は、何處にゐるか？ 麻紐に風信子石を付けた著物を著て、黄金の楯と、白銀の冑を被り、巨人のやうな容體をした埃及の若い男に溺れた女は、何處にゐるか？ 快樂の床、血族姦通の褥から眼覺めるやうに呼び起して遣れ！ そして主の道を聞く者の詞を聞いて、その罪を悔い改めるやうに呼び起して遣れ！ 若しもその女が、懺悔をもせず、猶その罪科を犯すならば、速かに茲へ連れて来い。今將に主は鞭を手にされてゐるから！」といふ。サロメは之れを聞いて、

「恐ろしい事！ 恐ろしい事！……」と思はず戦慄した。若いシリア人はサロメの身の上を案じて、

「此處におゐてになつては不可ません、姫君様。お願いですから。」といふと、サロメは、それを耳にも入れず、

『あの眼の恐ろしいこと。テイリアの毛氈に、火焰で焼き抜いた黒い穴のやうなこと。あの眼は、龍の棲んでゐる暗い洞穴のやうなこと。龍が巢を作つてゐる埃及の暗い洞穴のやうなこと。宛然あの眼は、異様な月に照らされてゐる暗黒い湖のやうなこと。あの男は、まだ一度何とか謂ふだらうか!』といふと、若いシリア人は、

『此處におゐてになつては不可ません、姫君様。どうぞお願いでございます。』と哀求した。サロメは猶、

『あの人は、何といふ瘦せてゐるのだらう! 丁度象牙の細長い像のやうなこと。宛然銀の肖像のやうだ。あの人は屹度お月様のやうに清淨無垢に違ひない。あの人は月の光のやうなこと。銀の月の光のやうなこと。あの人の肉は象牙のやうに冷いに相違ない。——私もつと傍へ寄つて見よう。』といふと、若いシリア人は、之れを留めて、

『不可ません。不可ません。姫君様!』といふ。

『私は、もつと傍へ寄つて、あの人を見なくてはならない!』

『姫君様! 姫君様!』と、若いシリア人は頻りに之れを留めた。この時ヨハナアンは、

『私を見詰めてゐる女は、一體何者だ! 私はあの女に見られたくない。あの輝いてゐる臉の下の黄金色の眼で、何のために私を見詰めてゐるのだ! 一體あの女は誰れなのか。私には解らない。また知らうとも思はない。さあ、彼方へ行け。私はあの女と話なんかしたくない。』といふ。サロメは、

『私はサロメなの。ヘロディアスの娘、猶太の姫君なの。』といふと、ヨハナアンは、

『素去れ、バビロンの娘! 主の選ばれた者に近寄るな! お前の母親の汚辱れた行爲はこの地を満たして、その罪の叫びの聲は、神のお耳にまで届いてゐるのだ。』と叫ぶ。サロメは之れを聞いて、

『その後を話してお呉れ、ヨハナアン。お前の聲は、私の心を佳い心持に酔

はして了ふ。』といふと、若いシリア人は、

『姫君様！ 姫君様！ 姫君様！』と叫びつゝ心配する。サロメは、猶、

『それから如何したの。その後を話してお呉れ、ヨハナアンや。私はどうすれば良いのか教へてお呉れ。』といふ。ヨハナアンは、

『私の傍へ寄るな、ソドムの娘。お前の顔を覆面紗で隠し、その頭に灰をふり掛けるがよい。そして人の子を探しに、沙漠へ行け。』といふ。サロメは、

『人の子とは、誰れの事なの？ その子は、お前のやうに矢張り綺麗なの？

ヨハナアン。』と聞く。ヨハナアンは、

『誰方へ行け、彼方へ行け！ 死の天使の翼の響きが、宮殿の中から聞えて来る。』といふ。若いシリア人は、

『姫君様、お願ひですから、直ぐに彼方へお戻り下さい。』と歎願する。ヨハナアンは、

『劍を持つて、お前は此處に何を探してゐるのか、私の主、神の天使！ こ

の汚れた宮殿に、何を前は探してゐるのか？ あの男が、銀の衣服を着て死ぬる日は、まだ来はしないのに。』といふ。サロメは、

『ヨハナアン！』と唯一言その名を喚ぶ。ヨハナアンは、

『私を呼んでゐるのは、誰れだ？』といふ。サロメは、

『ヨハナアン！ 私はお前の身軀に惚れてよ。お前の身軀は、まだ草刈者に觸れない野中の百合のやうに、眞白だから。お前の身軀は、懸て谷間へ滑り落ちて来る、猶太の山の雪のやうに眞白なこと。アラビアの妃の花園にある薔薇

の花でさへも、お前の身軀のやうに眞白ではない。アラビアの妃の花園、アラビアの妃の香料の園の花薔薇でも、木の葉を透して漏るゝ曉の薄明の足でも、

また海の上に碎くる月の胸でも、凡そこの世の中に於て、お前の身軀ほど眞白なものはない。どうかお前の身軀へ私を觸らしてお呉れ。』といつて、サロメは

この汚れに満ちた世の中に、今初めて清淨無垢のヨハナアンを見て、強い熱烈な戀を覺えたのである。けれど、ヨハナアンは、

『彼方へ行け、バビロンの娘。女のために、この世の中に罪といふものが出来たのだ。私に物を云ふな。私は聞きたくない。私は唯、私の神、主のお詞を聞くばかりだ。』と跳ね付ける。しかしサロメは激烈なる情熱を迸らして、
 『お前の身軀は、心持が悪い。宛然癩病の身軀のやうだ。丁度蝮蛇が棲んでゐる、白い塗壁のやうだよ。丁度蝸が巢をくつてゐる、白い塗壁のやうだ。丁度、汚い物の一杯に満ちてゐる白塗の墳墓のやうだよ。恐ろしい。お前の身軀は恐ろしい。けれど、お前の髪の毛が氣に入つたよ、ヨハナアンや。お前の髪の毛は、丁度葡萄の房のやうだ。丁度エドミテの國のエドム葡萄の蔓から垂れてゐる黒い房のやうだよ。丁度リバノンの巨大な杉類樹、その樹の蔭に、晝のうち獅子や山賊などが、姿を隠してゐる杉類樹のやうだ。丁度月が隠れて、星が恐がつて震へてる長い暗い闇夜でも、お前の髪の毛のやうに黒くはない。森の中に住んでゐる沈黙でも、それ程に黒くはない。凡そこの世の中に、お前の髪の毛ほど黒いものは他にない。どうか、お前の髪の毛に觸らしてお呉れ!』と

いふと、ヨハナアンは、
 『素去れ、ソドムの娘。私に觸つて呉れるな! 私の身體は神様の宿つてをられるお寺院だ。誰れでも觸つて汚すことはならない。』と叫んだ。サロメは又、
 『お前の髪の毛は恐ろしい。汚い物や塵埃だらけだ。丁度荆棘のやうだ。誰れかお前の頭の上へ載せた荆棘のやうだ。丁度お前の首へ巻き付かせた黒蛇の結び目のやうだ。私はお前の髪の毛は嫌ひだ。私はお前の口が好いの、ヨハナアンや! お前の口は象牙の塔の上に著いてゐる深紅色の房のやうだ。丁度象牙の小刀で切り開いた柘榴のやうだ。チルスの花園に咲いてゐる柘榴の花は、薔薇の花よりも紅いけれど、しかしお前の口のやうに紅くはない。王の到着を報知して、敵を驚かす喇叭の紅い音色でも、お前の口ほどに紅くはない。葡萄の液を絞搾る器械の中で、葡萄を踏んでゐる者の足よりも、お前の口の方が遙かに紅い。お寺の塔に住んでゐて、坊さん達に飼養はれてゐる鳩の脚よりも遙かに紅い。森の中で、獅子を殺して、立派な處を見て来た男の足よりも遙かに

紅い。お前の口は、漁師が海の底のうす明りの中で見出して、王様の飾りにと取つて置く珊瑚の枝のやうに赤い。お前の口は丁度モアブ人がモアブの洞穴から見出して、夫れ掘り出して王様に捧げる朱のやうに紅い。お前の口は、丁度朱で彩色つて、珊瑚で飾つたペルシヤ王の弓のやうだ。凡そこの世の中に、お前の口のやうに紅いものはない。私にお前の口を接吻させてお呉れ。』

『そんな事は決してならん。バビロンの娘、ソドムの娘、そんな事は決してならん!』

『私はお前の口を接吻したのだよ、ヨハナアンや。私はお前の口を接吻したいのだよ!』と云ふと、若いシリア人は、今は聞くに堪えぬ様子で、

『姫君様! 姫君様! 長春樹の花束のやうな、鳩の中の鳩のやうな貴姫様は、あんな男をお覧になつてはいけません。彼の男を御覧になりますな! あの男にそんな事を仰やりますな。私はそれを聞いてをる我慢が出来ません。姫君様、あの男にそんな事を仰やりますな!』と叫ぶ。しかしサロメは、

『私は、お前の口を接吻するよ、ヨハナアンや。』と云つて、愈々熱烈なる戀の詞を發するので、若いシリア人は、遂に嫉妬と失望の餘り、叫び聲を残して俄然自殺を遂げて、サロメとヨハナアンの間に倒れた。けれど戀に熱してゐるサロメは、それを着附かなかつた。これを見たヘロディアスの扈從は、若いシリア人の亡骸の傍に駈け寄つて、

『若いシリア人が死んだ! 若い大尉が死んだ! 私の友達が死んだ! 私は甘松香の小さな匂袋と、金の耳輪とをこの男に遣つた。そして今やこの男は自殺して畢つた! 噫、大變な事でも起らねばいゝがと、私が云つてゐた通りだつた。私が云つた通り、こんな事が起つて了つた! どうも今夜のお月様は、誰れか死んだ者を探してゐるやうだつた。噫、さうと知つたら、私はどうしてこの男を月の光から見えないやうに隠してやらなかつたのだらう。私はこの男を洞穴の中へでも隠して置いたなら、月もこの男を見付けなかつたらうに!』と云つて、その愛人の死を甚く嘆いた。第一の兵士は、サロメに、

『姫君様、若い大尉殿は今自殺されました。』といった。しかし誰れの如何なる詞も、もうヨハナアンの戀に熱したサロメの耳には入らなかつた。そして、
『私に、お前の口を接吻させてお呉れ。ヨハナアンや!』といふと、ヨハナアンは、愈々冷淡な態度で呷つた。

『恐ろしくはないか? ヘロディアスの娘。死の天使の羽音の聞いた事を、私はお前に云つたであらう。そして天使は現はれなかつたか?』しかしサロメは同じ詞を繰り返した。

『私に、お前の口を接吻させてお呉れ!』

『汚辱の産んだ娘、お前を救ひ得るものは、唯一人ある! 先刻お前に話した彼の人だ。行け!』そしてその人を探せ。その人はガリレアの海で小舟に乗つてゐられる。そして弟子どもに説教されてゐる。だから海の岸にひざまづいて、その人のお名を呼んで御覽。あの人は名を呼ばれれば、誰れの處へでも來られる。そして若し來られたら、その人の膝下に伏して、お前の罪を赦して頂

くやうに願ひするがいゝ。』と、ヨハナアンは覺すやうに云つたけれど、サロメは矢張り、

『お前の口を接吻させてお呉れ!』といふと、ヨハナアンは、

『呪はれてをれ。汚辱の母の産んだ娘。呪はれてをれ!』

『私は、お前の口に接吻したいのだよ!』といふと、ヨハナアンは、

『私はお前を見たくない。私はお前を見たくない。呪はれてをれ、サロメ、呪はれてをれ!』と詞を残して、再び井戸の中へ下つて行つた。第二の兵士はその跡に續いて行つた。そして廳で再び鎖の響きと、戸を閉づる音が聞えた。

四

跡にサロメは、尙ヨハナアンの去つた後を見送つて、

『私はお前の口に接吻するだらう。ヨハナアンや、私は屹度お前の口に接吻するよ!』と叫んだ。この時、第二の兵士は豫言者ヨハナアンを牢に入れて置

いて歸つて來た。第一の兵士は、

『この死骸を何處ぞへ持つて行かなくちやならないだらう。王様は御自分で殺された者の死骸の外は、御覽になるのがお嫌ひだから。』と云つた。

扈從は傷まし氣に、

『この男は私の兄弟だつたのだ。いや兄弟よりも猶と親しい間柄だつたのだ。私はこの男に、甘松香ナルデの小さい匂におひと袋と瑪瑙めなうの指輪を遣つたことがあつた。この男はいつも夫れを手に箆はめてゐた。夕方、私たちは河の岸や、杏あんずの樹の下を散步したものだ。その時この男は、いつも自分の故郷の事を物語つて聞かせた。そして、いつも極めて徐々おつろと話した。その聲は丁度人の吹く笛のやうな響きであつた。この男は、自分の姿を流れに映うつして見るのが好きであつた。が、私はこの男に、そんな事をするものではないと意見したものであつた。』と、回顧の情に堪へぬ様子である。第二の兵士は、
『それは尤もだ。しかし、この死骸を何處かへ隠さなければならぬよ。王

様が御覽になると不可いけないから。』といつた。

兵士等が、若いシリア人の死骸を擔かいで、後方うしろの古井戸の傍そばへ置いた時に、丁度へロデス王が宴會の席から現はれて來た。第一の兵士は之れを見て、

『王様は、此方こちの方へはおいでにならないだらう。王様は豫言者々大層恐れておゐでになるから、決して觀臺までおいでになつた事はない。』と云ふ折から、へロディアス妃きさきを始めとして、全宮庭の侍臣等が現はれて來た。

五

先づ王、及び王妃に續いて、チゲルリヌス、羅馬人ローマじん、へロデス王隨從の男女等、猶太人、ナザレ人、法利賽派パリサイの徒、ザツドツエ派の徒、マナツセエ、その他男女奴隸の群むれで、左手及び階段は一杯になつた。

へロデス王は、
『サロメは何處どこにゐる？ 姫は何處どこにゐる？ 宴會の席へ歸つて來いと云つ

たのに、何故歸つて來なかつたのか？ あゝ、此處に居つたのだな！』と云つた。ヘロディアス妃は、自分と先帝との間に出來た姫サロメに、ヘロデス王が戀慕して、その跡ばかり追つてゐるので、頗る不機嫌である。

『あなたは何日もサロメばかり見ておゐてになりますか、そんなにサロメばかり御覽になつてはいけません。』といふと、王はそれには答へないで、

『今夜は本當に月が妙に見える。さうではないか？ こんなに見えることは滅多にない。丁度氣の狂つた女が、其處ら中戀人を探して歩いてるやうだ。そしてあの月は裸だ。素ツ裸だ。雲がその裸の月を隠さうとするけれども、月は隠れようともしない。全く素ツ裸で出てゐる。そして酔拂つた女のやうに、雲の中をよろけながら歩いてゐる。確かにあの月は、戀人を探してゐるのだ。酔拂つた女のやうによろけてゐるではないか？ 丁度酔拂つた女のやうに見えはしないか？』といふと、妃は、

『あゝ、月は矢張り月でございます。何も變つてはゐません。さあ奥へ歸り

ませう。あなたは此處におゐてになる必要はございません。』

『いや、私は此處にゐる！ マナツセエ、敷物を彼處へ敷け。それから燒松を點け、象牙の机を持つて來て呉れ。碧玉の机を持つて來い。』と命ずると、マナツセエの眼配せに應じて、男女の奴隸は急いで宮殿へ行き、階段の中段に置いた敷物を持つて來る。また高い處に据ゑてあつた三脚の眩掛椅子と卓とを二人で運んで來る。ある者は酒や果物を運んで來る。ある者は盛に燃えてゐる燒松を、城壁の處に持つて立つてゐる者の手から取つて來る。また或る者は扇や拂子を持つて列んだ。樂人は管樂器や堅琴や、鐘鼓や、饒鉞などを持つて、古井戸の傍の右側に立つた。ヘロデス王は、

『此處は實に空氣がいゝ氣持だ。私は賓客と一緒に猶と酒を飲まう。羅馬皇帝の使者の人々を、鄭重に歡待しなければならぬ。』といふと、ヘロディアス妃は、

『あなたは、その爲めに此處におゐてになるのではありますまい。』

『いや、此處は奈何にも空氣がいゝ。ヘロディアスお來で。賓客が私等を待つてゐるよ。おや、血で滑つた。不吉な、實に不吉な兆候だ。どうして此處に血があるのだ。どうして此處に死骸があるのだ。お前達は、宴會の際に客に死骸を見せなければ止まないと云ふ埃及王だと思つてゐるのか？一體、その死骸は誰れのだ。私はその死骸を見たくない。』と、王は頗る不機嫌である。第一の兵士は、

『それは大尉でござります、我が君。やつと三日前に大尉になされました若いシリア人でござります。』と答へる。王は、

『私は、あの男を殺せなどとは命令しなかつたのに。』と云ふ。第二の兵士は、

『あの男は自殺したのでござります。我が君。』と答へる。

『どうして自殺したのだ。私はあの男を大尉にまでして遣つたのに。』

『吾々どもにも判りませぬが、兎に角、自殺致されました。』

『私にも奇異に思はれるが。私はまた自殺と言ふことは、羅馬の哲學者だけ

がするものと思つてゐた。なんとティゲルリヌス、羅馬の哲學者が自殺すると言ふのは眞實か。』

年若の羅馬人、ティゲルリヌスは畏まつて、

『はい、自殺する者もないではござりませぬが、それはストア派の哲學者で、ストア派の人々は粗野な人々でござります。可笑しな人々でござります。ほんに可笑しな人達と、この私は存じます。』

『それには私も同意見だ。一體、自殺をするなどは、可笑しな事だ。』

『左様でござります。羅馬ではどんな者でも、あの連中を笑はない者はござりませぬ。皇帝があゝの連中の事を諷刺した詩をお作り遊ばされましたが、その御製は、諸所方々で歌はれて居ります。』

『ナニ諷刺の詩を作られたとな。羅馬皇帝の多能には、毎度ながら驚嘆の外はない。……が、この若者が自殺したのは奇異でならぬ。可憐なことを致した。可憐な事を。ほんに好い男であつた。ずん好い男であつた。恍惚とし

た眼をして居つた。そして恍惚とサロメを見て居たやうに思ふが、ほんにサロメを見過ぎて居たやうだつた。』

ヘロディアス妃は横合から、

『サロメを見過ぎるお方が、何處ぞ其處らにもあるやうでござりますなあ。』
と言つたが、ヘロデス王は耳にも入れず、自殺した大尉の事で、頭腦が一杯になつてゐるやうに、

『この若者の父は、ある國王だつたが、私はその王を國から追ひ出した。そして、ヘロディアス、お身はこの男の母親の妃を、奴隸にして使つてゐた。そこでこの男は、その關係で客分として此處へ來たから、私は大尉に取り立てゝやつたのだが、氣の毒なことをした。ええッ！ 何故死骸をこの儘にして置いたのだ。早く取り片附ける。私はそれを見度うない。早く彼方へ。』

兵士は若いシリア人の死骸を運んで行つた。ヘロデス王は身慄ひして、

『此處は寒い。風がある。なんと風があるではないか。』

ヘロディアス妃は首を振つて、

『いえ、風はありません。』

『風があると申すに。：。そして羽叩きのやうな音が、大きな羽叩きのやうな音が、空中に聞えるではないか。お身にはあれが聞えぬのか。』

『妾には何も聞えませぬ。』

『うむ、私にも最早聞えない。が、確かに聞いたぞ。風の音に相違ない。大方吹き止んだのであらう。ややつ、又聞えるぞ。お身にはあれが聞えぬか。宛然羽叩きのやうだ。』

『何も聞えはしませぬのに。貴方はお加減が悪いのでござります。さ、さ、中へ入りませう。』

『イヤ、私は何ともない。病氣なのは其方の娘だ。病人のやうな顔色をして。あのやうに青い顔をして居たことはないが。』

と言ひながら腰を掛けた。チゲルリヌスと王妃も腰を卸した。扈從は王妃の

足許へ座を占めた。ヘロディアスは窘め顔に、

『彼女の顔を御覽になつては、可くませぬと申しますのに。』

ヘロデス王は耳にも掛けず、

『さあ、酒を注いで呉れ。』

美酒が其處へ運ばれた。王はサロメの方を見て、

『サロメ、此處へ来て私と一緒に酒を飲まぬか。此處に好い酒があるぞ。羅馬皇帝から送られたのだ。その小さい赤い唇を、この中へ觸けて呉れ。後は私が飲み干さうぞ。』

サロメは、外に氣を取られた儘答へた。

『妾は飲み度くありません。』

『あの答を聞いたか。』王は妃を見遣つて、

『お身の娘があつたやうな返事を。』

『道理な娘の返事。貴方は何故そのやうに娘ばかりを御覽じます。』と妃が言

つた。王はそれにも構はず、

『熟した果實を持つてまゐれ。』

其處へ果實の熟したのが運ばれた。王は又サロメを見て、

『サロメ、此處へ来て私と一緒に果實を喰へぬか。その小さい齒の跡の、果實に付いたのが見度い。この果實をひと口咬んで呉れ。残りは私が喰べやうぞ。』

『妾は饑くはありません。』

とサロメは外に氣を取られた儘、答へた。

『お前の娘はよく仕付けてあるな。』

王はヘロディアス妃を顧みて言つた。

『はい、娘も妾も、王の血縁を引いて居ります。貴方はどうでございませう。貴方のお父上は駱駝を追つてゐたお人、その上に追剥でございましたらう。』

『嘘をつけ。』

王は妃の言葉を打消したが、ヘロディアス妃は後を續けて、

『眞實だといふことを、よく御存知の癖に。』

『サロメ、此處へ来て、私の傍へ坐らぬか。私はお前の母の玉座に、お前を坐らせて取らさうぞ。』

と、王は娘の方へ氣を取られて言つた。

『妾は疲れて居りませぬ。』

サロメは、矢張り外に氣を取られた儘答へた。今のサロメの頭腦には、ヨハナアンの事を考へるより外には、何物を考へる餘地もないのである。

『これであの子が、貴方の事を、どう思つて居りますか、よくお判りでございます。』

ヘロディアス妃は心地好げに言つた。

『こりやく。』と王は人と呼んだが、

『ハテ何を吩咐けよとしたのかな。忘れてしまつた。お、さうであつた。想ひ出したぞ。』と、膝を叩く途端に、古井戸の中から、

『見ろ、時が来た。私の豫言した時が来た。見ろ、私のさう言つた日が来たのだ。』

豫言者の聲が聞えて来た。王妃は忽ち顔を擧めて、

『あ、彼奴を黙らしてお呉れ。妾はあの聲を聞き度くない。あの男はこの妾に、侮辱を加へるやうな事ばかり言つて居るのですよ。』

『何も、お前を侮辱するやうな事を言ひませぬ。それにあの男は、大豫言者なのだ。』

『妾は豫言者といふものを信じませぬ。未來どんな事が起るか、判る者がありませんか。誰れにでも判りは致しませぬ。その上にあの男は、妾に侮辱を加へるやうな事ばかり申します。貴方はあの男を恐れておいでになります。貴方が恐れておいでになるのは、妾よく存じて居ります。』

ヘロディアス妃は冷かに斯う言つた。王はその顔を見て、

『私はあの男を恐れては居らぬ。誰れだつて恐れはせぬ。』

『いえ、恐れておゐてなされる。まこと恐れておゐてなさらずば、六月前から猶太人が、渡して呉れと騒いで居るのに、何故渡してはおやりなさりませぬ。』

猶太人の一人が口を利いた。

『ほんにさうでござります。私共にお渡し下された方が好いと申すもの。』

『可い。私はもう返事がしてある。お前達の手には渡されぬ。ありや聖者だ。神を見たことのある人だ。』

『そんな事がござりませうか。豫言者エリ阿斯以来、神を見た者はござりませぬ。エリ阿斯が最後に神を見た者でござります。今時、神様がお姿をお見せなされるものでござりませうか。神様は隠れておいてなされる。そこで大きな禍ひが、この世に來たのでござります。』

最初の猶太人の尾に付いて、二番目の猶太人も口を開き、

『さう言へば豫言者エリ阿斯さへ、眞實神を見たものかどうだか知れたもの

ではござりませぬ。若しかしたら、神の影であつたやらも知れませぬ。』三番目の猶太人も、

『なんの、神様が隠れておゐてなされるといふ時があらうか。神様はいつ何時でも、何物にも姿を見せておゐてなされる。善い物の中に宿つておゐてなされるやうに、悪い物の中にも宿つておゐてなされる。』四番目の猶太人も、

『さう言つたものではない。それはほんとに危い教理だ。希臘哲學の流行する、亞歴山堡あたりから來る教理だ。そして希臘人といふ奴は異端の民だ。割禮さへも受けては居ない。』五番目の猶太人も、

『神がどのやうに働いてゐるかそれは判らぬ。その方法は神秘だから。吾々の惡と呼ぶものが善で、善と呼ぶものが惡であるかも知れぬ。何一つ判つたものではない。吾々人間は只従へばそれで可いのだ。神は強いからだ。神は強者をも弱者同様おひしぎなされる。そんな區別はしないのだ。』

『お主のいふのが眞の事だ。』と最初の猶太人は同意した。『神は恐しいものだ。』

臼の中の穀物のやうに、強いも弱いも搗き碎いておしまひなさる。だがこの井戸の中の男は、神様を見たのではない。神様を見た者は豫言者エリアスこの方ないのだ。』

妃は堪らないと言つた様子で、

『どうか、黙らせて下さいまし。何といふ詰らない事を言つてゐるのでせう。』ヘロデス王は猶太人に、

『だが、此のヨハナアンが豫言者エリアスだと言ふではないか。』最初の猶太人は本氣になつて、

『そんな事はござりませぬ。豫言者エリアスの時からは、三百年も絶つて居ります。』

『だが然らだと言ふ者もある。』といふ王の尾に跟いて、ナザレ人が、

『あの人は豫言者エリアスに相違ござりませぬ。』と言ふと、最初の猶太人は、

『イヤ、豫言者エリアスではござりませぬ。』と言ひ張つた。途端に古井戸の

中から、

『それ、日が来た。主の日が来たぞ。世界の救済者たるべき人の足音が、山上に聞えてゐる。』

『何の事だ。世界の救済者とは。』王は不審がった。チゲルリヌスは畏まつて、

『羅馬皇帝の尊號にござります。』

『だが皇帝はこのユデアへは來られまい。昨日羅馬から來た手紙にも、そんな事に書いてなかつた。そしてチゲルリヌス、お身は冬中羅馬に居たが、そのやうな事を聞き込みはしなかつたらうが。それとも聞いたかな。』

『何も聞き込みは致しませぬ。私は只尊號の事を申したのでござります。世界の救済者といふのは、羅馬皇帝の澤山ある尊號の中の一つだと申したのでござります。』

『皇帝の來られる筈はない。皇帝はひどい痛風で、足が象の足のやうに腫れてゐると言ふことだ。又、いろいろの事情もある。羅馬を離れば羅馬を失ふ。』

滅多めつたに來こられる譯わけはない。來こようと思おもへば來こられようが、どうも來こられさうに
ない。ナザレ人はもどかし氣きに、

『豫言者よげんしやの申まをしたのは、皇帝ていおうの事ことではござりませぬ。』

『皇帝ていおうの事ことではないか。』と王わうが訊たずねた。

『いかにも。』

『では何人なんびとのこことを言いつたのだ。』

『御出現ごしゆげんなされたメシアスの事ことでござります。』

『メシアスの出現しゆげんなされたことはない。』と猶太人きよほしが嘴くちばしを容ゆるれた。

『それでも出現しゆげんなされて、今方々いまはうで奇蹟きせきをなされておゐてなさる。』

『ほゝほゝ、奇蹟きせき。妾めかけは奇蹟きせきを信じない。今まで随分ずいぶん見て居ゐるから。』へロデ

イアス妃みかけは噴出ふきだしたが、扈從こじゆに向むかつて、

『扇あふぎを取とつてお呉くれ。』と言いつた。ナザレ人は眞顔まがほで、

『いえ、私わたしの申まをすお方かたは、眞實ほんたうの奇蹟きせきをなされます。ガリレアガリレアの小さい市まちで

婚禮こんらいがあつた時とき、水みづを酒さけに變かへたと、その席くらに連つらなつた、確たしかな者ものが申まをしまし
た。カペルナウムの門前かどでは、二人ふたりの癩病人らいびやうやみを、一寸手ちよつとで觸さわつた許ばかりて治なした
さうにござります。』二番目にばんめのナザレ人も、

『いや、カペルナウムで治なしたのは、盲めくらめの眼めをあけたのだ。』

『いや、癩病人らいびやうやみだ。が又また盲めくらめの眼めをおあけなされたのだ。それから山やまの上うへで、

天使てんしと話わをして居ゐられたさうでござります。』と最初さいしょのナザレ人が言いふと、

『天使てんしなどがあるものか。』とザツドツエ人が言いつた。

『天使てんしはある。がこの男おとこが天使てんしと話わをしたとは、私わたしにはどうも受取うけとれぬよ。』

法利賽人パリサイじんが口くちを出いした。ナザレ人は躍氣やつきになつて、

『でも、あの人ひとが天使てんしと話わしてゐるのを、見た者みたものが大勢おほいある。』

『そりや天使てんしとではない。』ザツドツエ人が又また言いつた。

『まあ何なにたる話わらない話わをしてゐるのだらう。ほんに可た知かしな人達ひとたちだ。』へロ

デアス妃みかけはかう言いひ終はつて、扈從こじゆに向むかひ、

『さあ、妾の扇を。』と言つた。扈従が扇を差し出すと、その眼をザツと見て、
『お前は夢見る人のやうに見える。夢を見るのではありませぬぞ。夢を見る
のは病人ばかりだから。』

妃は扇で扈従を打つた。二番目のナザレ人は進み出て、

『それから未だヤイルスの娘の奇蹟もござります。』

『さうく、あれならば確かな事、誰れも嘘とは言はれまい。』

『この人達は氣が狂つてゐる。あんまり月を見てゐた故だ。静かにするやう
に、さう被仰つて下さいまし。』

と妃はヘロデス王に言つた。王はそれにも拘らず、

『して、其のヤイルスの娘の奇蹟とは何だ。』

『はい。ヤイルスの娘が死にました。それを其の人が甦らせたのでござりま
す。』とナザレ人が答へた。

『ナニ、死人を甦らせるのか。』

『左様でござります。死人を甦らせます。』

『そんな事はさせたくない。私はそれを禁ずる。死人を甦らせる事は誰れに
も許さぬ。その男を探し出して、死人を甦らせることを禁ずると言ひ付けな
ければならぬ。その男は今何處にゐるな。』

『あの方は、何處にでもおいでなされますが、探し出さうと言ふのは、ちと
難しうござります。』と二番目のナザレ人が答へた。

『只今サマリアに居られると言ふこととござります。』とナザレ人の一人が代
つて答へると、最初の猶太人が、

『その人がサマリアに居るのなら、メシアスでないのは明白だ。サマリア人
の所へはメシアスは出現しない。サマリア人は呪はれてゐるのだ。彼處の人間
は寺院へ何一つ贄を供へた事がない。』

『四五日前に、サマリアを立たれたといふ事ゆゑ、エルサレムあたりにあ
方はおゐでだらうと思ふ。』と二番目のナザレ人が言つた。最初のナザレ人も、

『いや、彼處には居られない。私はたつた今エルサレムから来た許りだ。二月と言ふもの、何の便もあの方からはなかつた。』

『いや何うでも好い。が見付け出した上で、死人を甦らせる事は、この私が許さぬと言はせなければなるまい。水を酒に變へ、又癩病や盲目を癒すのは、勝手だから、私は何とも言ひはすまい。癩病を癒すなどは好いことだ。が死人を甦らせる事は誰れにも許さぬ。死人が蘇生するなどは恐ろしい事だ。』

王は死人を甦らすと聞いて、先王を弑した自分の罪を恐れて、かう言つたのである。この時又もや古井戸から、

『あゝ、淫婦、賣女、金の眼と銀の臉をしたバビロンの娘。主の仰せぢや。其方の周圍には澤山の人が集り、その人々は手に手に石を取つて、其方に投げようぞ。』と言ふ豫言者の聲が聞えた。

『あゝ、あの男を黙らせて下さい。』と、妃が言つた。ヨハナアンの聲が尙續いた。

『遂長どもの劍は其方を刺さう、楯をもつて其方を壓し殺さうぞ。』

『マア極りの悪い。』と妃は怒つた。ヨハナアンの聲は更に續いて聞えた。

『すべて地上の不行跡を、かうして拭ひ去らう。そしてすべての女どもが、其方の放埒の眞似をせぬやうにしようぞ。』

『妾に向つていふ事は、貴方もお聞きになりましたらう。自分の妃をあのやうに謗つても、許してお置きなされますか。』

『でもお身の名前を言ひはせぬではないか。』とヘロデス王が慰めた。

『それが何になります。あの男の悪口が、妾の事だといふことは、よく御承知でござりませう。妾はあなたの妻ではありませぬか。それともさうではござりませぬか。』

『いかにも愛しいヘロディアス。お前は私の妻だ。その前には兄の妻だ。』

『あの人の腕から、妾をお奪りなされたのは、貴方でござります。』

『いかにも、私の方が強かつたから。……が、そんな話は止めましょう。私

はそんな事を言ひ度くはない。豫言者の言つた恐ろしい言葉に就いて話して居たのだ。事によつたら、恐ろしい不吉な事が来るのかも知れぬ。イヤ、そんな事はもう言ふまい。ヘロデイアス、お客人を外にした。サア、この盃に注いで呉れ。この銀の盃に、玻璃の大盃にも満々と注いで呉れ。私は羅馬皇帝の爲めに飲まらざ。羅馬の方々が来て居られる。吾々は皇帝の爲めに飲まなければならぬ。』と王が盃を取り上げると、一同『皇帝萬歳』を稱へた。王はサロメを見て、『ヘロデイアス、お前の娘を御覽。何といふ青い顔だらう。』

『娘の顔が青からうとなからうと、それが貴方にとつて何でございませう。』

『だが、私は未だあのやうに青い顔をしてゐるのを見た事がないからな。』

『娘ばかり御覽になつては可くませぬ。』

王と妃が頻りに言ひ合つてゐると、空井戸の中から、

『其の日には、日は髪を包む布のやうに黒くなり、月は血のやうになり、み空の星は熟れた無花果が、無花果の樹から落ちるやうに地に落ち、地上の王者

は恐れ戦くであらう。』

といふ豫言者の聲が聞えた。

『ほゝほゝ、月が血のやうになり、星が熟した無花果のやうに、地に落ちると言ふやうな目が見度いものね。この豫言者は醉漢のやうな事を言ふ。』とヘロデイアス妃は噴飯したが、又詞を續けて、『だが、私はあの聲が聞いてゐられない。あの聲が厭だ。あの聲が厭だ。あの男を黙らせて下さいまし。』

『私には出来ぬ。あれの言つてゐる事は判らぬが、何ぞの前表であらうも知れぬ。』王は沈んだ調子で斯う言つた。

『前表などがあつて可いものでせうか。あの男は醉漢のやうな事を言つて居るのです。』と妃は取り合はない。

『神の葡萄酒に酔痴れてゐるのかも知れぬ。』

『神の葡萄酒とは、どのやうな酒でございます。どこの葡萄園で採れ、どこの醸造庫で醸されます。』

王はヂツとサロメを見詰めながら、上の空で、『チゲルリヌス』と呼んだ。

『お身が羅馬に居られた時、皇帝の話されたといふあの、それ。』

『何でございますな。』羅馬人が訊ねた。

『何、お、私はお身に何か聞いたの。え、何を聞いたか忘れてしまった。』

『貴方は又娘ばかり見て被居る。娘を御覧になつては可くませぬ。さう申し

上げたではございませぬか。』と妃が言つた。

『お身はそれより外の事を言はぬ。』

『妾はもう一度申し上げます。』

『お、そして寺院の再建のことを兎や角申して居つたが、如何致した。内陣の帳帷が失せたさうだが、ではなかつたかの。』

『それをお盗りなされたのは、貴方御自身ではござりませぬか。出放題なこ
とばかり。妾はもう此處には居られませぬ。サア、彼方へまゐりませう。』王は
それに耳をも貸さず、

『サロメ、私の爲めに舞うて呉れ。』

『舞はせることはなりません。』と妃が遮つた。

『妾は厭でございます。』サロメが答へた。王は重ねて、

『サロメ、舞うて呉れ。』

『氣儘にして、お置きなさりませ。』と妃が言つた。

『サロメ、私は舞へと命じてゐるのだ。』

『厭でござります。』サロメが答へた。ヘロディアスは笑ひながら、

『御覧なさいまし、まあよく仰せを聞きますこと。』

『舞はうとも、舞ふまいとも、私には何でもない事だ。ほんに今宵の心地好

さ。何時にない心地の好き。こんな心地の好い事は、これ迄にもなかつたわい。』

と獨語つへロデス王の顔を、第一の兵士は見上げながら、

『王様のお顔は陰氣に見える。何とさうは見えぬか。』

『本當に、陰氣なお顔色だ。』と次の兵士が答へた。

『これが心地好うなうて何としよう。』王は詞を續けて、『世界の主、萬物の主なる羅馬皇帝が、私に好意を有つてゐて、貴重な品を贈られる。又私が敵カッパドシア王を、羅馬へ召喚すると約せられた。若しかしたら、羅馬で磔刑にするのかも知れぬ。皇帝は何でも思ひの儘になるのだから。皇帝のやうなのが眞の君主と言ふものだ。そこで、此の私も心地好うなうて何としよう。イヤ好い心持だ。これ程好い心地の事はなかつた。この幸福を傷けるものは地上にない。』と言ひ終ると、空井戸の中から、

『それは玉座に坐つて居よう。紫と緋の袍を着て、手には身の誹謗を湛えた、黄金の盃を持つて居よう。主の御使は、あれを打ち斃さるゝであらう。あれは蛆に食はれて畢はふ。』といふ聲が聞えた。

『お聞きなさいましたか、貴方の事を言つて居ります。貴方が蛆に食はれてしまふと申しました。』とヘロディアス妃が注意するのを、王はそれを制めて、

『イヤ、あれは私の事でない。私の事は何にも言はぬ。ありや、カッパドシ

アの王の事だ。わが敵カッパドシア王の事だ。あれが蛆に食はれるといふのだ。私ではない。兄弟の妻を妻にしたといふを譏つた外には、この豫言者は私に向つて何とも言ひはせぬ。が、あの男のいふ方が正しいかも知れぬ。ほんに、お前は石胎だから。』

『妾が石胎、あの妾が。妾の娘を見てばかり被居る貴方が、そして、お慰みにあの子を舞はせようとなさる貴方が、よくもそんな事を被仰られたものです。飛んだ事を仰せられます。妾は一人子供を生みました。が、貴方にはお一人もありません。貴方の側室も誰れ一人、子供を生みませぬ。石胎といふのは貴方のこと、妾ではござりませぬ。』

『黙れ、女。お前こそ石胎だ。私の子は一人も生まぬ。私等の結婚は、眞の結婚ではないと豫言者が言つた。不倫の結婚、呪はれた結婚だといふ。こりや然うらしいわい。どうも然うらしい。イヤ、このやうな事を言つてる場合ではない。私は今心地好くしてゐたいのだ。ほんに私は心地好い。何も不足に思は

ない。』

『今宵貴方の御機嫌なのは、喜ばしう存じます。滅多にない事でございますもの。でも、最早晩うございますから、奥へ参りませう。明朝未明に、臘においで遊ばすことをお忘れなさりますな。羅馬皇帝の御使者には、出来るだけのお接待をしなければなりません。何とさうではござりませぬか。』

第二の兵士は、王の顔を見てゐたが、同僚を顧みて、

『なんと、王様の顔は陰氣ではないか。』

『本當に陰氣に見える。』と、第一の兵士が答へた。

『サロメ、サロメ、舞うて呉れ。頼むのだ。今宵私は悲しうてならぬ。悲しうて堪らぬのだ。此處へ来た時、血で辻つた。こりや悪い前兆だ。私は聞いた。私は確かに羽叩きを、巨大な翅の羽叩きを空中に聞いた。それは何だか私には判らぬ。……私は今宵悲しいのだ。だから舞うて呉れ。サロメ、頼むから舞うて呉れ。舞うて呉れたら、欲しい物を取らせうぞ。この王國の半分でも取らせ

うぞ。』と王は乗り出して、サロメに舞を所望した。今まで躑つてゐたサロメは、此時すつくと立ち上つて、

『妾の欲しいものを、屹度下さりますか。』

『舞ふのではないよ娘。』と、ヘロディアスが言つた。

『お、何でも、この王國の半分でも。』

『貴方は、それをお誓ひなされますか。』

『お、誓はうとも、サロメ。』

『舞ふのではないよ。娘。』と、ヘロディアスは重ねて傍から遮つた。

『私の命、私の王冠、私の神に掛けて誓はうとも。舞ひさへすれば、欲しいものは何でもやる。この王國の半分でも。あ、サロメ、サロメ、舞うて呉れ。』

『貴方は、お誓ひなされましたな。』

『お、サロメ。私は誓うたぞ。』

『妾の欲しいものは、この王國の半分でも。』サロメは念を押した。

『舞ふのではないよ。娘。』ヘロディアスは更に傍から制めた。

『おゝこの國の半分でも。この國の半分、其方の望みなら。定めし美しい女王が出来る事であらう。なんと美しい女王ではないか。おゝ、此處は寒い。氷のやうな風が吹く。あゝ又聞える。……何故、私には空中に羽叩く音が聞えるのか。鳥があるのかな。黒い大きな鳥が、この平場の上あたりに居るさうな。だが、何故私には鳥が見えぬのか。その羽叩きは恐ろしい。羽風の音が恐ろしい。冷たい風だな。いや、冷たいのではない、熱いのだ。呼吸が詰まりさうだ。手に水を掛けて呉れ。』と云ふと、奴隷は急いで玉の傍に来る。玉は又詞を續けて、

『雪を喰べさせろ。上袍を脱がせろ。早く、早く。上袍を脱がせろ。イヤイヤ、宜しい。苦しいのはこの花環だ。頭に頂く薔薇の花環だ。花が火のやうになつた。額が焼けてしまふ。』と身悶えしながら、玉は頭の花環を裂き取つて、卓の上へ投げつけた。

『おゝ、これで漸く呼吸が出来る。あの花環の赤いことは、白布に附いた血のやうだ。だが、そんな事はどうでも可い、見るもの毎に意味を付けてゐた日には遣り切れぬ。それでは生きて居られまい。血を見ても薔薇の花環のやうに美しいと言ふべきだ。何でもさう言つた方が好い。イヤ、こんな事を言ふのではなかつた。私は心地が好い、心地好くしてゐるのだ。心地好くする権利がないといふ法はあるまい。お身の娘は、私の爲めに舞うて呉れる。喃、サロメ、お前は私に舞うて見せて呉れるのだな。舞ふといふ約束だつた喃。』

『舞ふことはなりません。』とヘロディアスが言つた時、

『妾は貴方の爲めに舞ひませう。』とサロメが言つた。玉は笑壺に入つて、

『あれ聞いたか、ヘロディアス。私の爲めに舞はうとよ。サロメ、よく言つた。舞つた上で望みの品を言ふことを忘れまいぞ。何なりとも取らせるぞ。この王國の半分でも。私は誓つたのだ。さうではないか。』

『貴方はお誓ひなされました。』とサロメが言つた。

『私は誓ひを破つたことはない。破約するやうな者ではない。私には嘘がつけぬ。私は自分の言葉の奴隷、私の言葉は倫言だ。カツパドシア王はいつも嘘許り吐いてゐるが、ありや眞の王ではない。ありや卑怯者だ。私に借りた金を返さない。使者に對しては無禮な事をする。人を傷けるやうな語を言ふ。だが、羅馬へ行つたら、皇帝に擱つて磔刑に會ふことだらう。皇帝は屹度磔刑になさるに違ひない。でない迄も、死んで、蛆に喰はれる。あの豫言者がさう豫言をした。サロメ、何を逡巡して居るのだ。』

『奴隷の女が匂ひ膏と、七筋の巾を持つて来て、杳を脱がせて呉れますのを、妾は待つて居ります。』と言つてゐる所へ、奴隷の女共が、匂ひ膏と七筋の巾を持つて来て、サロメの杳を脱がせた。王はそれと見て、

『おゝ、跣足になつて舞ふのか。好いく。その小さい足が白い鳩のやうに見えよう。木の上で躍つてゐる白い小さな花のやうに見えよう。……否々、血潮の上で舞ふ。其處には血が流れてゐる。血の上で舞ふのは悪い。不吉な兆だ。』

『娘が血の上で舞へばとて、それが何でござりませう。貴方は血の中をお渡りなさつたてはありませぬか。』

ヘロディアスがかう言ふと、王は不興氣に、

『それがどうした。おゝ、月を見る。赤くなつた。豫言者が豫言した通りだ。月が血のやうに赤くなる、とあの男は豫言した。お前達も皆聞いたな。何とさう豫言しなかつたか。そして今、月は血のやうに赤くなつた。お前達はあれを見ないのか。』

『えゝ、妾にはよく見えます。』王妃は嘲るやうに『そして星が熟れた無花果のやうに落ちるのです。さうでございましたね。それから日が髪包みの布のやうに黒くなり、地上の王達が恐れ慄くのでした。これ丈は誰れにも見えます。地上の王が恐れ慄くといふのは、豫言者がその生涯に一度だけ言當てた言葉です。さ、彼方へ参りませう。貴方はお加減が悪いのです。皆様が羅馬へお歸りなすつてから、貴方は氣が狂つておいでだと被仰るかも知れませぬ。さあ、彼方へ

参りませう。』と促した時、空井戸から、

『エドムから来るのは誰れだ。ボヅラから来るのは誰れだ。紫染めの衣を纏うて、その衣は光り輝き、偉なる姿をして歩いて来るのは誰れだ。何故、その衣は緋に染めてあるのか。』といふ聲がした。

『さあ、参りませう。あの男の聲は、妾の氣を狂はせます。あの男が喋舌つてゐる所で、娘に舞はせ度くはありません。又貴方がそんな風にして娘を御覽なさる所で、舞はせ度くはありません。妾は舞はせ度くないのです。』と立ち掛けるのを、王は慌て、止めながら、

『待て、立つな。何にもならぬぞ。私は舞ふまでは何處へも行かぬ。舞へ、サロメ舞へ。』

『舞ふのではないよ。』とヘロディアスが言った。

『それでは。』とサロメは七筋の巾を取つて舞ひ初めた。そして妖艶な舞を舞ひ終ると、王の足下へ跪いた。

『やんや、く。』ヘロデス王は上機嫌で、王妃に向ひ、『なんとお前の娘は私の爲めに舞うたらうが。こちへ来い、こちへ来い。サロメ、褒美取らさう。舞うた者には充分禮をせねばならぬ。王者として恥かしからぬ禮をしよう。お前の心の欲するものを遣はさう。何が欲しいか。言うたが好い。』

『すぐに頂戴致したうござります、銀の盤にのせて。』

『銀の盤にのせて。』とヘロデスは笑ひながら、『うん、銀の盤へ。何と嬉しいことを言ふではないか。銀の盤にのせて、何が欲しいな。猶太の娘の中でも、いち美しい王女サロメ。銀の盤にのせて欲しいと言ふのはそりや何だ。うむ、何であらうと屹度取らせる。私の實はお身の寶だ。そしてサロメ、その品は。』

『ヨハナアンの首級。』と云つてサロメは立ち上つた。

『お、よく言やつた。娘。』とヘロディアスの喜ぶのを、王は制めて、『いや、』と頭振を振つたが、

『好く言やつたの、娘。』と又もや口出しするので、

『いや〜。サロメ、お身が望みはそれではあるまい。母の言葉に耳を貸すな。好い事を教へはせぬ。その言葉を聞かうとするな。』

『母上のお言葉ではありませぬ。ヨハナアンの首級を、銀の盤へのせて頂き度いのは、妾一人の望みでござります。貴方はお誓ひなさりました。貴方はお誓ひなすつたのを、よもお忘れにはなりませんまい。』

『知つて居る。私は神かけて誓うた。よく知つて居る。がサロメ、何か他の物を望んで呉れ。私が頼む。この王国の半分でも。欲しくば取らさう。が、それ丈は言ふな。今お前の望んだのは。』

『ヨハナアンの首級でござります。』

『いや〜それを言ふのではない。』

『それでも、貴方はお誓ひなされました。』

『ほんに貴方はお誓ひなされた。一同聴いて居ります。貴方は一同の前で確かにお誓ひなさりました。』

傍からヘロディアスが口を出すのを、

『控へろ。お前に言つて居るのではない。』と叱した。

『それでも、娘はヨハナアンの首級が欲しいと申して居ります。妾を侮り辱めたあの男の首級が欲しいとはよく言つた。ほんにあの男は、妾に向つて恐ろしい事ばかり申しました。その首級が欲しいとは、娘がどれほどこの母を思つてゐるかが判ります。さあ、娘。少しも遠慮するには及びませぬ。お誓ひなされたのだから。』

『黙れ。私に物を言つて貰ふまい。これ、サロメ、考へて見て呉れ。私はお前に辛くした事はない。いつも可愛がつてゐる。可愛がり過ぎてゐるかも知れぬ。それゆゑそのやうな物を欲しがるとはならない。こりや恐ろしい酷い事だ。其方は戯れてゐるのであらう。胴を離れた人の首は、見て快いものではない。さうではないか。娘子供の眼に見るものではない。何の面白いことがあらう。何にもない。そのやうな事は止めにして、私の言ふことを聴くが可い。私は瑪

瑠を持つてゐる。羅馬皇帝の嬖妾が贈つて呉れた、大きな圓い瑪瑙だ。この瑪瑙を透かして見れば、遠い／＼所に在るものが、手に取るやうに見えるのだ。皇帝が競馬場に成らせらるゝ時は、同じやうな物を持つて行かれる。が、私はそれよりも大きいのだ。本當に大きいものだ。世界一の大瑪瑙だ。欲しくば取らさう。どうだ。欲しいと言へ。直ぐにもやらう。』

『ヨハナアンの首級が欲しいのです。』

『私の言ふことを聴かないのか。私の言ふことを。サロメ、まあ私の言ふことを辛抱して聴いて呉れ。』

『ヨハナアンの首級を。』

『いや／＼、其方の欲しいものはそれではあるまい。宵の口から見詰めてゐたから、お前は私を困らせようとして、そんな事を言ふのか、ほんに私は宵からお前を見詰め通した。お前の美しさが私を悩ませた。苦しい位悩ませた。私は餘りお前を見過ぎた。が、もう見まいよ。人をも物をも見てはならぬ。見て

よいものは鏡ばかりだ。鏡に見ゆるは影ばかりだ。あゝ、酒を持って。咽が渴く。……サロメ、サロメ、仲直りをしよう。此處へ来い……。ハテ私は何を言はうとしたのか。何であつた。それ／＼、思ひ出した。……サロメ、もそつと傍へ寄りや、聞えないといけぬ。サメロ。お前は私の白い孔雀、美しい白い孔雀を知つてゐよう。庭園の天人花の木と丈の高い糸杉の間を歩いてゐる。その嘴には金箔を置いてある。與る餌にも金箔を置いてある。脚は染めてある。鳴く時には雨が降り、尾を擴げれば大空に月がのぼる。糸杉と黒い天人花の木の間に、二羽宛列んで歩いてゐる。一羽に一人宛奴隷が附いてゐる。時には木々の梢を越えて、又草の中や湖の周圍に憩ふ。あのやうな珍らしい鳥は世界にもない。こんな珍らしい鳥を有つてゐる王は世界中にない。羅馬皇帝さへ、私の有つてゐるやうな美しい鳥は有つて居られぬ。あれを五十羽お前にやらうぞ。お前のとから鳥が跟いて行つたら、お前は大きな白雲の眞中にある月のやうに見えよう……。おゝ、百羽とも皆お前に與らうよ。世界中の王さへ、私の孔雀のやうな凡

雀は有つてゐない。それを皆お前にやらう。たゞその代り、私の誓ひを清して呉れ。そしてお前が望むやうな事を私に言つて呉れるな。』
と言ひ切つて、卓上の盃を取ると、グツと一呼吸に飲み干した。

『ヨハナアンの首級を下さいますし。』と、サロメは同じことを繰り返した。

『おゝよく言つた、娘。ほんにへロデス、貴方は孔雀の事と言ふと、可笑しい位でございます。』

とへロディアスが口を容れた。

『黙れ。よく喚く。猛禽のやうに喚き立てる。止さぬか。その聲は私を疲れさせる。黙れと言ふに。：：サロメ、自分のする事を考へて見る。この男は神が寄越した者かも知れぬ。彼は聖者だ。神の指の觸れた者だ。神はその口に恐るべき言葉を言はせた。宮殿の中に居ても、砂漠の中にも居ると同じやうに、いつも神が附いてゐる。：：付いてゐるかも知れないのだ。誰一人判る者はないが、付いてて助けるといふ事も有り得る事だ。しして見れば、その男が死ねば、』

何か災禍が私に起らうも知れぬ。自分の死ぬ日には、誰れかの上に災禍が起らうと、あの男も言つてゐる。その災禍を蒙る者は、私の他にありはせぬ。さうだ。私はこゝへ入つて来た時血で辻つた。又空中に羽叩きを聞いた。大きな翅の音だ。これは甚だ凶い兆だ。未だ他にもあらう。私には見えぬが、屹度未だ他にあるだらうと思ふ。さあ、サロメ。私に災禍の起るのを、お前とて望みはすまい。お前とて望むまいな。さて、私のいふ事を聴いて。』

『ヨハナアンの首級を下さいますし。』

『私の言ふことを聴かないのか。落着いて呉れ。私は——私は落着いてゐる。この通り落着いてゐる。マア聞け。こゝに寶が隠してある。お前の母親にも見せた事のない、素張らしい寶だ。四列につけた眞珠の頸飾がある。銀の光線で月を連いだやうに見える。黄金の綱で月を五十許りも捕へたやうだ。あの國の女王が象牙なす胸の上に飾つた飾りだ。お前がそれを頸に掛けたら、女王のやうに美しく見えるだらう。私は紫水晶を二種有つてゐる。一つは葡萄酒のやう』

に黒く、一つは水を混ぜた葡萄酒のやうに赤い。虎の眼のやうな黄色い黄玉石、
 山鳩の眼のやうに桃色の黄玉石、猫の眼のやうな緑色の黄玉石がある。氷のや
 うな炎で、始終燃えてゐる蛋白石、人の心を悲しうさせる、暗影の恐ろしい蛋
 白石がある。死んだ女の眼球のやうな縞瑠璃を有つてゐる。月の通りに色變り
 がして、日の光を見せると、色の褪せる月長石がある。鶏卵ぐらゐの大きな青
 玉がある。そして青い花のやうに青い。その中には海が波立つてゐて、その波
 の青い色は、月がさしても褪ますことは出来ない。また橄欖石や、綠柱玉や、
 翡翠玉や、紅寶石がある。赤縞瑪瑙や風信子石や、玉髓がある。私は何でも其
 方にやる。その上何でも添へてやらう。今しがた、印度の王から鸚鵡の羽で拵
 へた四本の扇を贈つて呉れた。又ヌミヂアの王からは、駝鳥の羽で拵へた衣裳
 を贈つて呉れた。私は女に見せることを許さぬ水晶を有つてゐる。若い男に見
 せる前に、鞭で打つてからでなければ見せられない水晶を有つてゐる。青螺の
 箱の中に入れた、珍らしい土耳其石を三顆有つてゐる。それを額につけると、無

いものを想像する事が出来る。男がそれを手に持つてゐると、女が懐妊せずに
 済む。皆珍寶ばかりだ。金銭で買はれぬ品物ばかりだ。イヤこれ許りではない。
 黒檀の箱の中には、黄金の林檎のやうな琥珀の盃が二つ入つてゐる。敵がその
 中へ毒を仕込めば、銀の林檎のやうに色が變る。琥珀で張つた箱の中には、玻
 璃を張つた杓がある。セレスの國から持つて来た上袍もある。エウフラテスの
 市から取つて来た紅寶石や、硬玉を飾つた腕環がある。……この他に何が欲しい。
 サロメ。欲しい物を言へ。何でもやる。たつた一つの品の外は、欲しい物は何
 でもやる。たつた一人の命の外は、私のものなら何でもやる。司祭の僧の上袍
 でも、内陣の帷帳でも。』

と、ヘロデス王の言ふのを聞いて、猶太人は『あゝ、あゝ』と歎息した。
 『ヨハナアンの首級を下さいますし。』とサロメは猶も繰り返して止まぬ。
 ヘロデス王は、サロメの心の堅きに、今は力及ばずして、椅子に倒れかゝり
 ながら、

『欲しいと言ふものを取らせるがよい。本當に母親の子だ。』

妃は國王の手から、死の指輪を抜いて、近づいて來た第一の兵士に渡した。兵士はそれを首斬役のナアマンに渡した。首斬役は驚いた顔をした。

『私の指輪を取つたのは誰れだ。右の手に指輪があつた。私の酒を飲んだのは誰れだ。私の盃には酒が注いであつた。酒が一杯あつたのに、誰れが飲んだ。あゝ、誰れかが災禍を蒙るに違ひない。』

王が斯う言つた時、首斬役は古い空井戸へ下りて行つた。

『あゝ、どうして私は誓ひを立てたのかしら。國王と言ふものは、誓ひを立てるものではない。誓ひを守らないのも恐ろしければ、又守るのも恐ろしい。』と歎息すると、妃は傍から、

『ほんに娘は好い事を致しました。』と言つた。王は首を垂れて、

『何か災禍が起るに相違ない。』

サロメは空井戸に倚り掛かつて、ヂツと耳を傾けた。

『音もしない。聞えない。何故聲を立てないのだらう。誰れか私を殺さうとしたら、妾は聲を立て、諍はずには居ない。何で堪えられるものか。お斬り、お斬り、ナアマン、お斬り。判つたのかい。何も聞えぬ。静かだ。恐ろしい静かさだ。あつ、何か地へ落ちた。落ちた音がした。劍の落ちた音らしい。あの奴隸、恐いのだね。自分の劍を落したのだ。殺せないのだね。憶病者。兵士をやらう。』

サロメはヘロディアスの扈従を見て、

『こゝへお出で。お前は先刻死んだ人の友達だね。さうではないかえ。一寸お聞き。未だ人が死に足りない。兵士のところへ行つて、この空井戸へ降り、妾の欲しいものを、陛下が妾に下すつたものを、妾のものを取つて來るやうに、さう言つてお呉れ。』

けれども、扈従がヂリ／＼後退りをするので、兵士の方に向いて、

『さあ、早く空井戸の中へ入つて、あの男の首級を討つて來てお呉れ。』と言つたが、同じく兵士も後退りするのぞ、

『陛下、ヨハナアンの首級を持つて来るやうに、兵士達に命令けて下さいませ。』と言つた時、眞黒な大きな腕が二本、空井戸の中からぬつと出た。腕は銀の盤にのせた豫言者ヨハナアンの首を差し上げてゐる。サロメは近寄つてその首を受け取つた。ヘロデス王は、それを見まいとして、思はず袍の袖で顔を隠した。ヘロディアスは扇を使ひながら微笑んでゐた。ナザレの人達は一同跪いて、祈禱を初めた。サロメは首を拖きかゝへて、

『おゝ、ヨハナアン、お前はこの口に接吻させなかつたね。今こそ接吻してやるから。熟れた果實を咬むやうに、妾のこの齒で咬んであげるよ。ヨハナアン、さあ、お前の口に接吻する。妾はさう言つた。言ひはしなかつたかい。いや、妾はさう言つた。あゝ、今こそ接吻してあげるよ。……だけでもヨハナアン、どうして妾の顔を見ないの。怒りや侮蔑で恐かつた眼も、最早瞑つてしまつたのね。どうして瞑つてしまつたの。眼をお開き。お前の臉をお上げよ、ヨハナアン。どうしてお前は妾を見ないの。お前は妾が恐いので、それで妾を見

ないの。ヨハナアン、毒のある蛇のやうなお前の赤い舌も、最早動かぬ。ヨハナアン。妾に毒を吐きかけた緋の毒蛇も、最早何とも言はないのね。奇妙ではないか。どうして赤い蛇が動かなくなつたの。……ヨハナアン、お前は妾を何處から何處までも嫌つたのね。妾を拒ね付けたのね。妾に悪口を言つたのね。お前は妾を、猶太の王女、ヘロディアスの娘サロメを、よくも娼妓のやうに、淫婦のやうにあしらつたのね。さあ、ヨハナアン。妾はまだ生きてゐます。そしてお前は死んでゐる。お前の首級は妾の所有だ。妾の仕度いやうに出来る。犬にでも空の鳥にでも投げてやれる。犬が餘したら、空の鳥が喰べるだらう。……ヨハナアン、ヨハナアン。お前は妾が愛したたつた一人の人だつた。他の男は皆嫌ひだ。お前は美しかつた。お前の身軀は銀の土臺の上に立つてゐる象牙の柱のやうでした。鳩と銀の百合で一杯になつてゐる花園のやうだ。象牙の楯で飾つた象牙の塔のやうだ。お前の身軀のやうに白いものは世界にない。お前の髪の毛のやうに黒いものは世界にない。お前の口のやうに赤いものは世界にない。

お前の聲は奇異な薫を立てゝゐる香爐のやうで、妾がお前を見てゐると、奇異な音楽が聞えて来る。ハヨナアン、お前はどうして妾を見なかつたの。お前は自分の手と呪ひの言葉で、自分の顔を隠したのね。神を見やうとする目隠しで、お前の眼を隠したのね。ヨハナアン、お前は神を見ました。けれども妾を見なかつたのね。妾を少しも見なかつた。もし妾を見たことなら、お前は妾を愛したらうに。妾は、妾はお前を見た。ヨハナアン。そしてお前を愛したのだ。お前、どんなにお前を愛したらう。ヨハナアン、妾はお前を愛してゐる。お前だけを愛してゐる……お前の美しさに渴ゑてゐる。お前の身軀に飢ゑてゐる。お前も果實も、妾の欲望を鎮めはせぬ。何としたものだらう。ヨハナアン。流れも海も、妾の熱情を消しがたい。妾は王女だ。それをお前は蔑視んだ。妾は處女だ。それにお前は妾から純潔を奪つてしまつたのだ。妾は純い身軀だつた。お前は脈管に火を注いだ。……あゝ、あゝ、ヨハナアン、何故お前は妾を見て呉れなかつたの。若しか見たら愛したらうに。屹度變して呉れたらうに。死の

秘密よりも、戀の秘密の方がずつと大きいものだから。そして人の考へなければならぬのは、戀より他にないのだから。』
 『あれは化物だ。お前の娘は化物だ。ほんに大きな罪を犯した。知られぬ神に對する罪に違ひない。』と國王が言ふと、妃ヘロディアスは満足さうに、
 『妾は又娘がよく致したと存じます。彼方へは参りますまい。此處に居りませう。』

『あゝ、それが妻の言ふことか。來い。私はもう此處には居られぬ。來いと
 言ふに。恐ろしい事が起りさうだ。』國王は立ち上つて『マナツセエ、イツサハ
 ル、オシアス。炬火を消せ。私は見度くない。見て居られない。炬火を消せ。
 月を隠せ。星を隠せ。ヘロディアス。さあ、奥殿深く隠れよう。私は恐ろしく
 なつて來た。』

奴隸共は炬火を消した。折から星は消え、月は大きな黒雲に隠れた。あたり
 は眞暗になつた。國王は一同を引き連れて、階段を登りかけた。途端に、暗い

中からサロメの聲が聞えて来た。

『あゝ、ヨハナアン。お前の口に接吻した。お前の唇は苦い。血の味かしら。』

：：戀の味かも知れない。：：戀は苦いと言ふから。：：そんな事はいつでも可い。どうしても可い。お前の口に接吻しましたよ。ヨハナアン。』

この時、一條の月光がサロメの上へ落ちて、彼女を照らした。

王は階段へ登りながら、サロメを振り返つて見て、

『あの女を殺せ！』

と叫んだ。

兵士はツカ／＼と進み寄つて、猶太の王女、ヘロディアスの娘サロメを、桶をもつて壓殺した。

サロメ終

大正三年七月六日印刷
大正三年七月十日發行

(定價金拾錢)
(郵税金貳錢)

ア
カ第
ギ八
叢編
書

著者 村上 静人
發行者 赤城 正藏
印刷者 中田 福三郎
印刷所 秀英舎第一工場

東京市麹町區三番町五〇
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元
賣捌所

東京市麹町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

赤城正藏
全國各書林

アカギ叢書

毎月數篇
逐次刊行

（定價金拾錢）
（郵稅各貳錢）

- 第一編 歐洲文藝 村上靜人原作 編輯 人形の家（一名ノラ）
- 第二編 哲學叢話 中島文學士原作 著 普拉グマチズム
- 第三編 歐洲文藝 日野月文學士著 癡都（劇に現はれたる女性改題）
- 第四編 社會學叢話 葛西文學士譯作 痴衆心（上卷）
- 第五編 歐洲文藝 原ドストイエフスキイ 作 痴
- 第六編 歐洲文藝 村上靜人著 其著作人
- 第七編 哲學叢話 三浦文學士篇 ベルグソンの哲學
- 第八編 歐洲文藝 村上靜人篇 サロメ

- 第九編 哲學叢話 中島文學士著 オイケンの哲學
- 第十編 博物叢話 寺尾理學士編 イダノウの進化論
- 第十一編 日本史談 龍居文學士著 文政化の世態
- 第十二編 歐洲文藝 フライタツハ原編 喜劇新聞記
- 第十三編 歐洲文藝 スチヴンソン原譯 壺の鬼者
- 第十四編 歐洲文藝 トルストイ原譯 復活
- 第十五編 歐洲文藝 （發賣禁止） レディースマン（一名ベラ、ミ）
- 第十六編 美術叢話 佐々木文學士著 奈良の美術
- 第十七編 歐洲文藝 モーバツサン原編 女の生
- 第十八編 歐洲文藝 メーテルリンク原編 モンナ、ヴァンナ
- 第十九編 日本史談 龍居文學士著 日本建築史要

274
900

特色

(一) 科學文藝より粹を抜き英を取り紳士の標準智識たるを期す
 (二) 廉價、簡明、平易に解説して天下に讀み難きもの無からしむ
 (三) 名著の紹介は簡にして精髓を失はず

○第二十編	社會學叢書	ルボン	葛西又次郎	原作	群衆心理	(下卷)
○第廿一編	美術叢話	桑山益二	編	支那の美術		
○第廿二編	歐洲文藝	板垣文學士	編	ワンドンダー、ブツク		
○第廿三編	歐洲文藝	ストリンドベルヒ	村上静人	編作	父	
○第廿四編	歐洲文藝	沙上翁	編作	ハムレット		
○第廿五編	歐洲文藝	ダヌンチオ	日野月文學士	編作	全	ジヨバンニ (上卷)
○第廿六編	歐洲文藝	全		全	ジヨバンニ	(下卷)
○第廿七編	歐洲文藝	村上静人	編作	神曲		

終

